

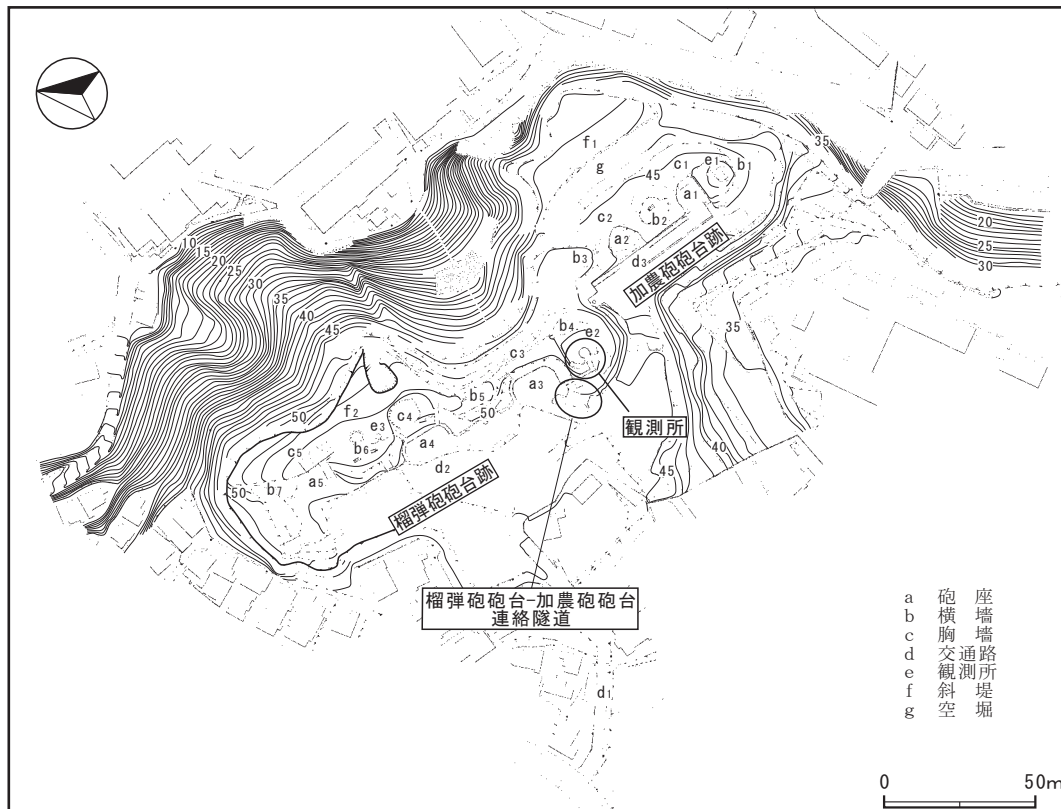
第2章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

昭和45年（1970年）に開園した中央公園は米ヶ浜演習砲台跡の旧地形を利用して建設され（第4図）、調査時には北西部の榴弾砲砲台跡の横牆・胸牆上に休憩所を兼ねる展望台と園路、観測所跡に（旧）平和モニュメントが建てられ、榴弾砲砲台の南東に位置する加農砲砲台跡は横牆・胸牆が削平されて縁石で区画された植栽の中に園路が巡り、園路に沿って休憩施設、横須賀出身の歌人・島田修二や岩崎泡鳴の歌碑、戦後混乱期に着任した米海軍司令官デッカー大佐の胸像などが配置された園地として整備され、東端の観測所跡には公園開園に先立って昭和44年（1969年）に建立された戦没者慰霊塔が存在していた。

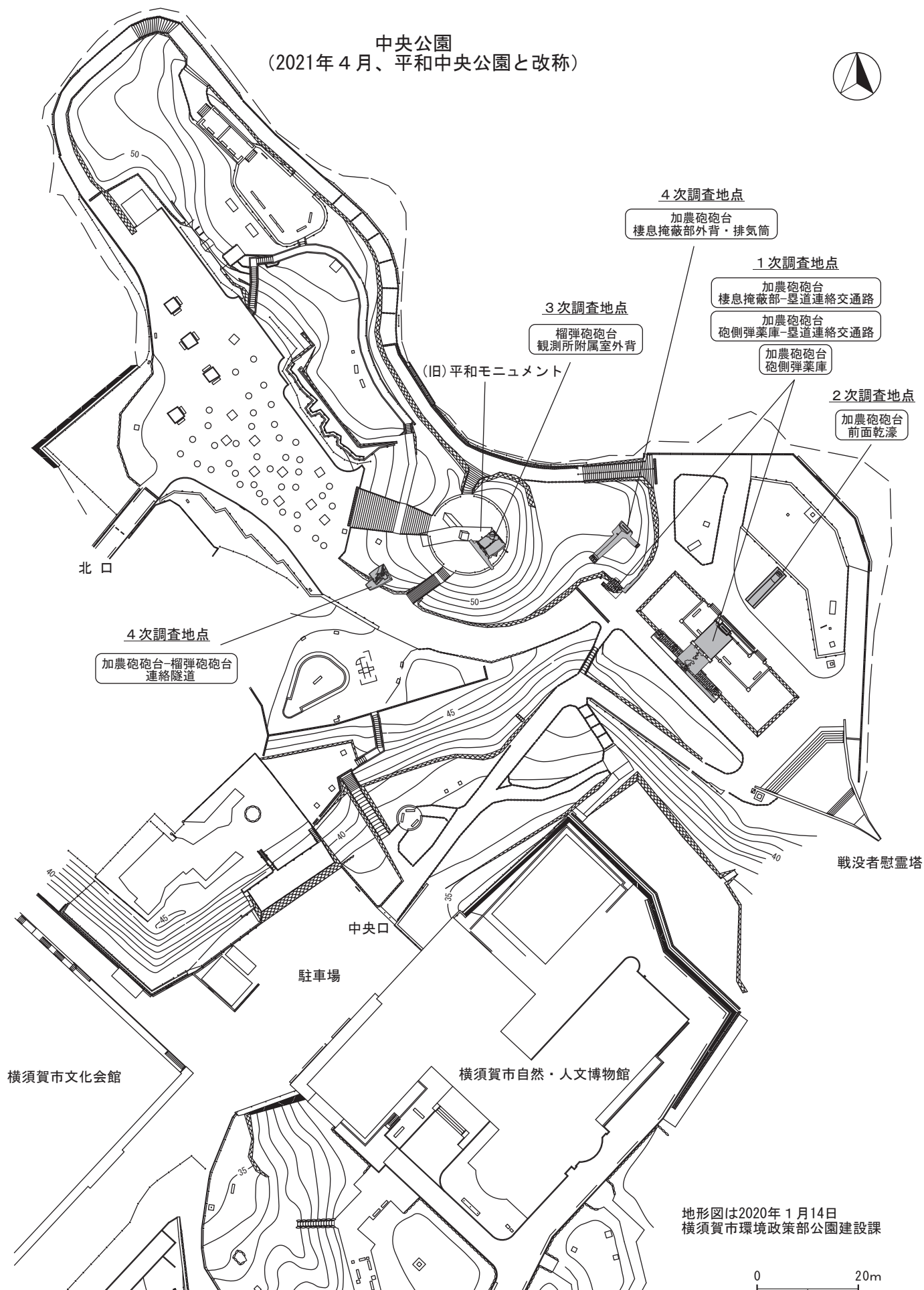
令和2年度（2020年度）に計画された中央公園再整備工事は加農砲砲台地区と榴弾砲砲台観測所地区が主な整備対象で、加農砲砲台地区の既存の休憩施設など公園施設を撤去・整地、開放的な円形の芝生広場を造成し、榴弾砲砲台観測所跡に既設の（旧）平和モニュメントを撤去、新たに平和モニュメントを設置するとともに進入路としての階段新設などの工事内容であった。

加農砲砲台地区は戦後の公園建設によって横牆・胸牆は削平されていたが、縁石によって園路と区画された南西植栽の中に設けられた休憩施設内には、砲側弾薬庫の排気筒が残されていた。排気筒は表面を鉄平石で被覆され、休憩所内のベンチに取り囲まれて休憩施設の一部として利用されていた。再整備工事による円形芝生広場造成のために排気筒は撤去されることから、横須賀市環境政策部（現建設部）公園建設課と横須賀市教育委員会は遺構の取り扱いについて協議し、排気筒は測量調査によって記録保存すること、地下の砲側弾薬庫と棲息掩蔽部及び連絡する交通路は埋められて詳細が不明だったことから、再整備事業に伴って遺構の保全あるいは損傷を最小限にするために必要な情報収集を目的とした確認調査を行うこととした（第5・6図）。



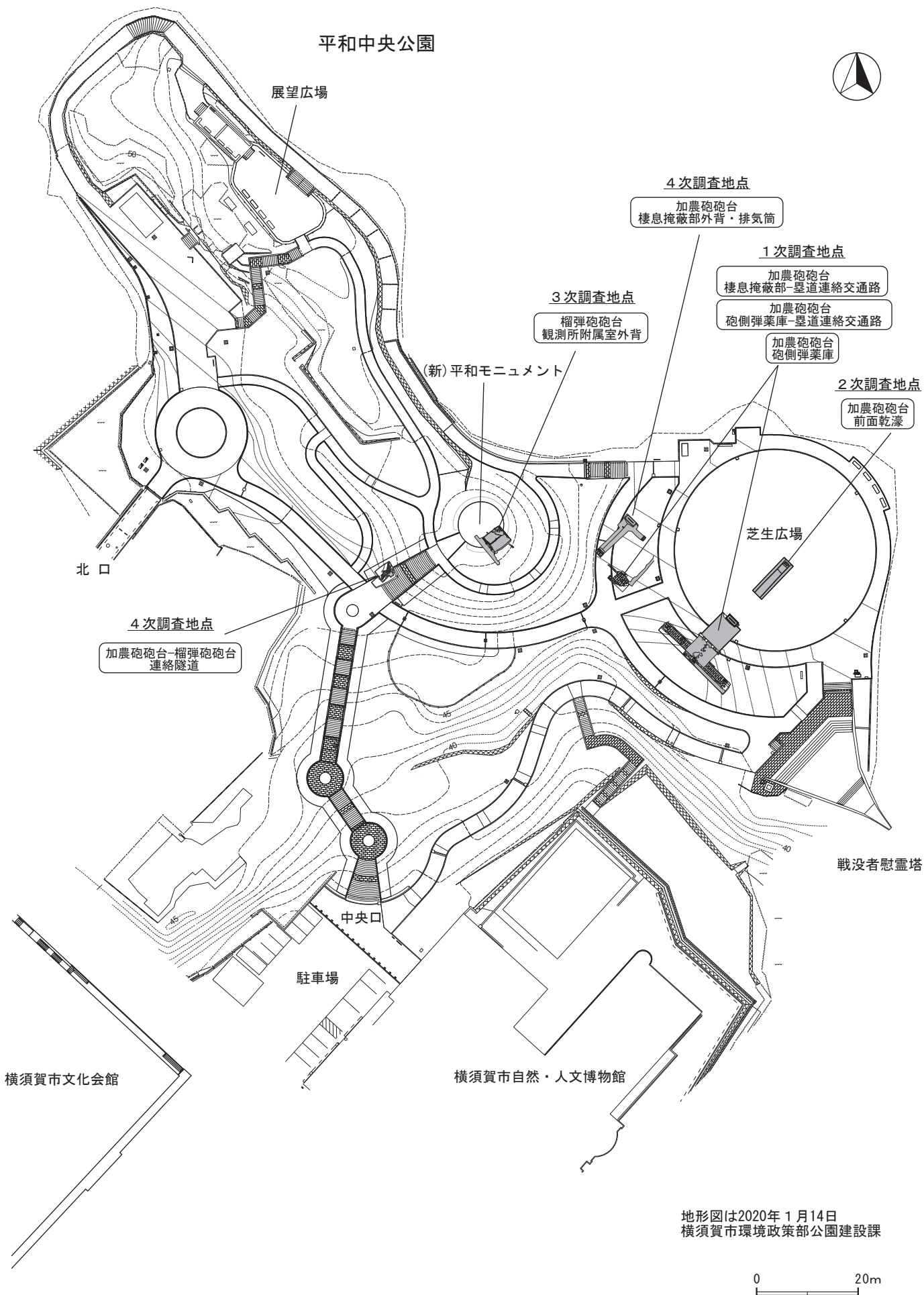
第4図 横須賀市中央公園建設以前の地形（野内2017に加筆）

中央公園
(2021年4月、平和中央公園と改称)



地形図は2020年1月14日
横須賀市環境政策部公園建設課

第5図 調査時の「中央公園」の公園施設と調査区の位置



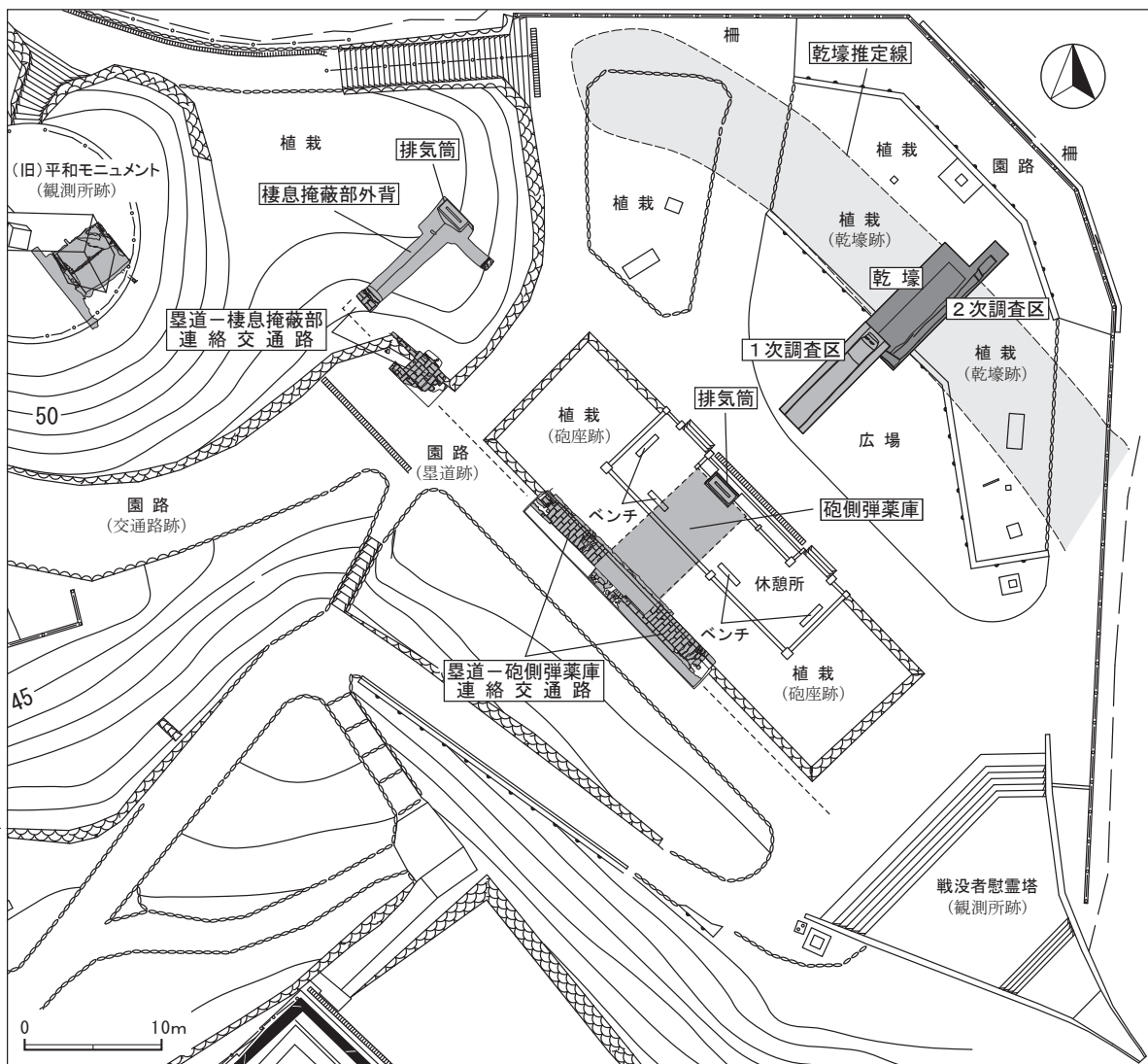
第6図 調査後の「平和中央公園」の公園施設と調査区の位置

第2節 調査の経過

横須賀市環境政策部（現建設部）公園建設課との協議を受け、横須賀市教育委員会は令和2年（2020年）2月17日～3月27日にかけて、加農砲砲台砲側弾薬庫・排気筒の記録保存と加農砲砲台砲側弾薬庫・棲息掩蔽部の発掘調査を行った（1次調査）。

昭和45年（1970年）に作成された中央公園開園前の現況測量図（第4図）を参考すると、11.3m×34.5mの規模で矩形に縁石で囲まれた南西植栽は加農砲砲台の砲座間の横壁に相当し、縁石南西辺はほぼ砲側弾薬庫の被覆壁の位置と推定された。また、南西植栽から園路、鉄平石が敷設された広場をはさんで15.0mほど離れて外周園路によって区画された北東植栽の地下に加農砲砲台前面乾壕の存在が推定された。

これらのことから、南西植栽の縁石南西辺を基準線として塁道－砲台砲側弾薬庫連絡交通路及び砲側弾薬庫室内の遺存状態確認を目的に縁石南西辺に沿って幅2.5m、長さ18.0mの規模の調査区、北西延長線上に塁道－棲息掩蔽部連絡交通路遺存状態確認を目的に幅2.0m、長さ4.0mの調査区を設定した。また、加農砲砲台前面乾壕の確認を目的として、基準線とした縁石南西辺に直交して排気筒中央を通る延長線上に調査区を設定したが、1次調査時点では加農砲砲台前面乾壕の存在が想定される土地の大部分は縁石で区画された北東植栽が残されていたために広場の鉄平石を除去して幅2.5m、長さ9.0mの調査区を設定して乾壕南西部検出を行った（第7図）。

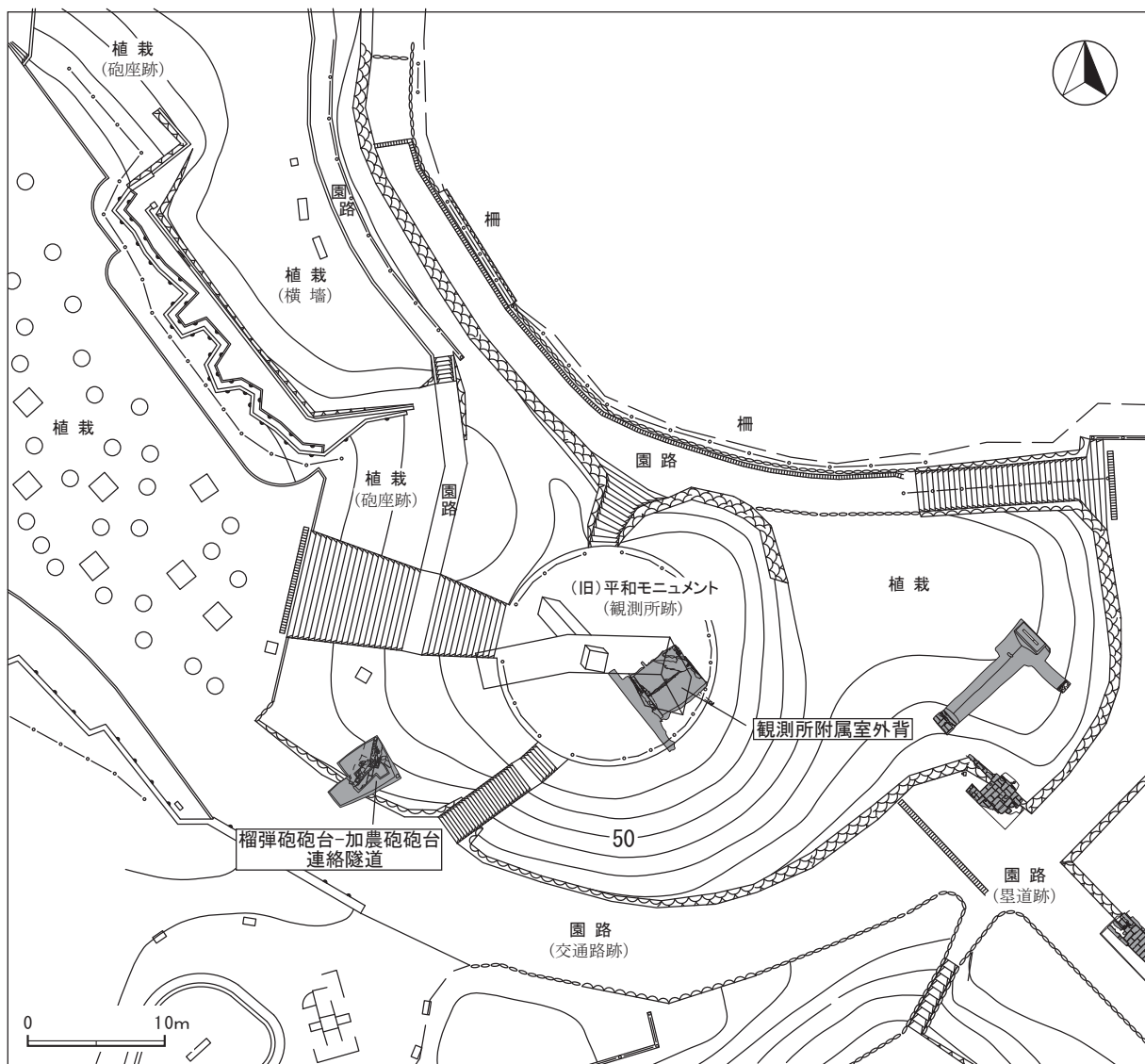


第7図 加農砲砲台砲側弾薬庫・棲息掩蔽部・乾壕調査区位置図

2次調査は加農砲砲台前面乾壕の主体部上に存在した北西植栽が除去された後、令和2年（2020年）8月18日～8月26日に加農砲砲台前面乾壕の北東端検出によって乾壕の幅（壕幅）、深度（壕深）など規模や形状と遺存状況把握のために、1次調査区の北東に2次調査区を延長・拡張して発掘調査を行った（第8図）。

工事着手前に想定した調査対象の調査終了後、整備事業の進行に伴って榴弾砲砲台観測所付属室外背、加農砲砲台棲息掩蔽部外背と排気筒、加農砲砲台－榴弾砲砲台連絡隧道の一部が露出したために、適時、測量を主とした調査を行った（第7図）。榴弾砲砲台・観測所跡で（旧）平和モニュメント解体に伴って、観測所付属室外背の一部と推定されるアスファルトで被覆された構造体が露出したため、令和2年（2020年）9月1日～9月3日に露出した観測所付属室外背の周囲の土を除去、精査し外背の規模と裏込め、付属室と観測所を連絡する伝声管の測量調査を行った（3次調査）。

その後、加農砲砲台棲息掩蔽部背後の植栽が施された土地の整地工事によって、排気筒と棲息掩蔽部の外背が露出した。そのため、令和2年（2020年）10月26日～10月29日に外背の規模確認を目的に東側脚壁と裏込め確認の調査区を設定、排気筒とともに測量調査を行った。また、平和モニュメント新設に伴う進入路工事では加農砲砲台と榴弾砲砲台を連絡する隧道の加農砲砲台側の出入口が開口した。棲息掩蔽部外背調査に引き続いて、令和2年（2020年）10月26日～11月6日に、加農砲砲台－榴弾砲砲台連絡隧道の発掘調査を行った（4次調査）。



第8図 榴弾砲砲台観測所跡・加農砲砲台－榴弾砲砲台連絡隧道跡調査区位置図

第3章 調査報告

第1節 加農砲砲台・砲側弾薬庫

(1) 加農砲砲台・塁道一砲側弾薬庫連絡露天交通路(第9・10図)

加農砲砲台・砲側弾薬庫跡の調査は、塁道と砲側弾薬庫を連絡する交通路の露天階段と砲側弾薬庫室内、撤去される排気筒を対象とした。調査時に露天階段は土砂で埋められ、加農砲砲台塁道と併せて園路としてアスファルト舗装されていた。南西植栽・南西辺の縁石を除去後、露天階段を覆う埋土を排出、階段と階下路面、コンクリートブロックで閉塞されていた弾薬庫出入口を検出、コンクリートブロックを取り除き、測量調査を行った。

加農砲砲台塁道と砲側弾薬庫はブラフ積被覆壁で東西を囲まれた、同規模・同構造の南北2路線の階段で連絡し、階下路面は南北の階段最下段間5.0mの規模で、砲側弾薬庫の出入口が設けられた前面壁まで奥行4.0mの空間を形成していた。北階段と南階段は階段数16段、標高約44.0mの塁道天端石から砲側弾薬庫の出入口に繋がる標高約40.5mの階下路面まで高低差(階高)約3.5m、階段最上段から最下段までの垂直距離(掛け巾)約5.0m、傾斜角約32度で建設されていた。階段踏み面は幅約1.5m、奥行き33.0~34.0cm、蹴上高約22.5cmの規模で、踏板には段鼻が丸く整形された厚さ6.5~7.5cmの花崗岩が用いられ、踏板下に灰褐色粗粒凝灰岩切石が台石として据え置かれていた。灰褐色粗粒凝灰岩の蹴込面は平坦に成形されていたが、上面は不整形な窪みが作出され、上位に据えられた花崗岩踏板の間にモルタルが充填されていた。

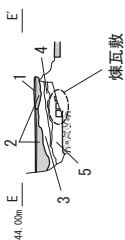
北階段と南階段は塁道との接続部路面はモルタルが破損、踏板は喪失、踏板下の灰褐色粗粒凝灰岩が露出していたが、被覆壁面に塁道路面と上面を同じ高さの壁面に挟りこまれた踏板装着痕が残されていた。北階段の塁道面と階段の接続部分では塁道路面下、最上段踏石下の灰褐色粗粒凝灰岩北側に接して普通煉瓦が平坦に敷かれ、また、最下段から4~8段付近の踏板が原位置を移動した状況で検出された。

露天階段の東西の被覆壁は30.0cm×30.0cm×60.0cm規格の直方体切石が用いられたブラフ積で、石材は灰褐色ないしは黄褐色粗粒凝灰岩が採用されていた。東被覆壁の石材は灰褐色粗粒凝灰岩を主体に組積されていたが、煉瓦アーチの北側とアーチの上部から南側上位段にかけて不規則に黄褐色粗粒凝灰岩が用いられていた。また、煉瓦アーチ頂部外弧と南側被覆壁の一部はモルタル充填による補修跡が存在した。東被覆壁は階下路面からブラフ積最上段まで高さ4.5mで、階下路面から3段は階段と煉瓦アーチによって被覆され確認できないが、遺存する段数は15段で、最上位の直方体切石の上面にはモルタルが付着していたことから、壁面は上位に延びていたか、あるいは天端石が据えられていたと推定された。被覆壁同一面の中央に厚さ煉瓦4枚半、約1.0m幅の半径3.5mの煉瓦アーチが開口し、開口部から2.5m内側に砲側弾薬庫出入口・採光窓を持つ前面壁が建設されている。アーチ開口部から前面壁までのヴォールト天井は底状の構造となり、連続する露天の階下路面と併せて5.0m×4.0mの規模の空間が確保されている。前面空間の脚壁は煉瓦造で路面から約55cmでヴォールト起点となり、ヴォールト天井は無筋コンクリートが採用されている。前面空間路面の西側被覆壁際中央に、丸形枠付き格子目の排水目皿で覆われた排水口が開口している。排水口下には開口部27.5cm、内径17.5cm、長さ55.0cm、厚さ2.4cmの円形土管が埋設され、前面空間の路面は排水口に向かって緩やかな傾斜を持っている。

西側の被覆壁は塁道端に付設された安山岩を石材とした天端石から階下路面からまで11段、高さ3.5mで、石材の規格は東側被覆壁と同じだが、石材はすべて灰褐色粗粒凝灰岩が使用されていた。北側階段最上段から2.5m、3.5m南側の壁面にはほぼ縦方向に走る亀裂にモルタルを充填した補修痕が存在した。西側被覆壁中央には、階下路面から3.2mに鉄環、1.7mに受金具が埋め込まれた安山岩からなる揚弾施設が付設されていた。鉄環は外径12.0cm、孔径7.0cm、受金具は外径15.0cm、孔径6.0cm、鉄環上端から受金具孔底まで1.0mの規模で、鉄環が設置された配石に隣接する配石の上面に径3.5cm、高さ18.0cmの鉄製丸棒が垂直に埋め込まれていた。

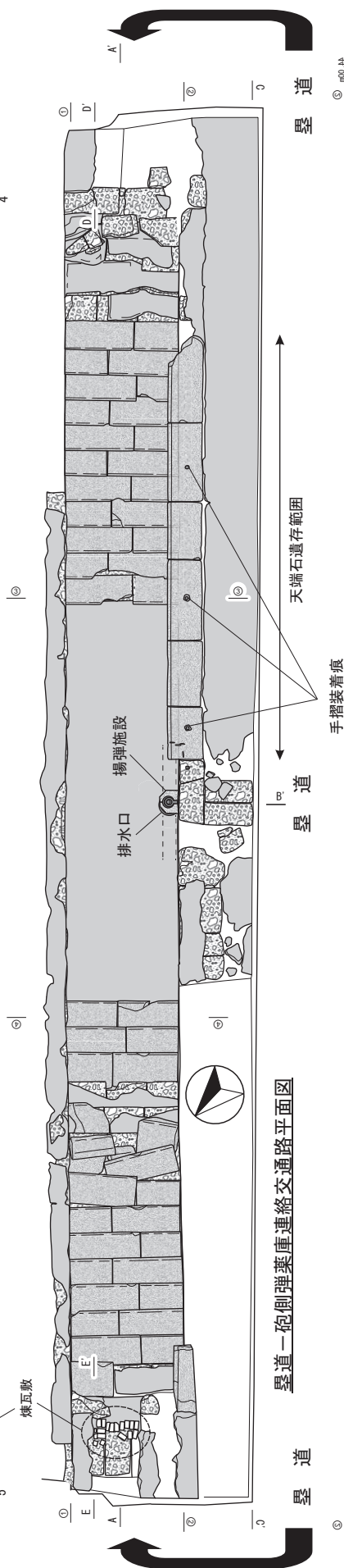
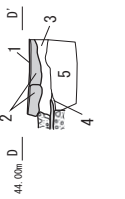
西側断面堆積層説明

- 1 層 皇道路面仕上げモルタル層。
- 2 層 コンクリート層。
- 3 層 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土層。軟質。
- 4 層 褐色 (10YR4/5) ローム質土層。粘性弱。軟質。
- 5 層 褐色 (10YR4/5) ローム層。



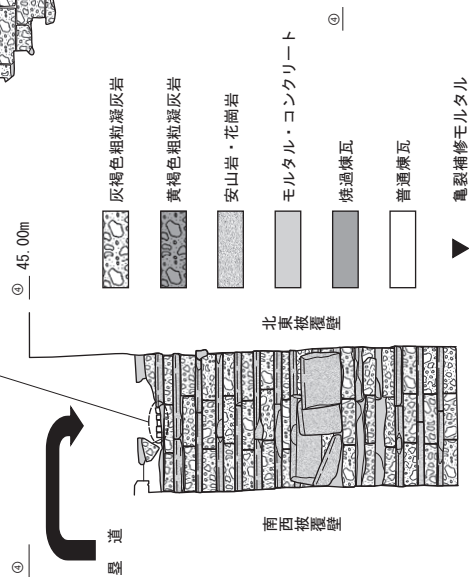
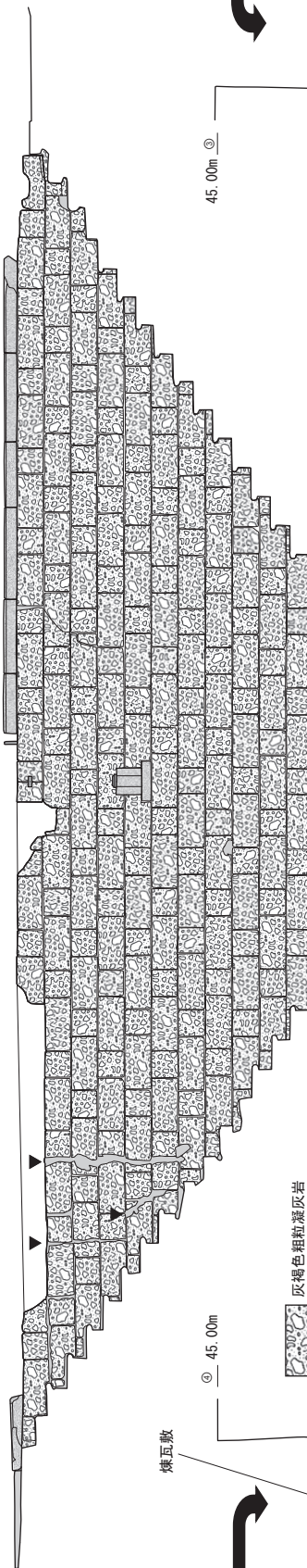
東側断面

- 1 層 皇道路面仕上げモルタル層。
- 2 層 コンクリート層。
- 3 層 褐色 (10YR3/4) 土層。軟質。コンクリート小片を含む。
- 4 層 褐色 (10YR3/4) 土層。均質。
- 5 層 褐色 (10YR3/4) 土層。円礫・煉瓦小片を少量含む。



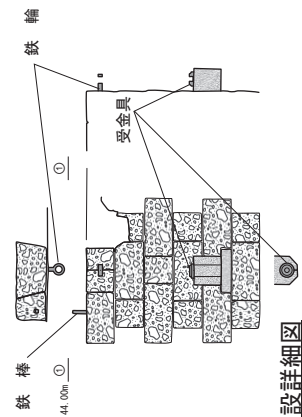
皇道一砲側弾薬庫連絡通路平面図

皇道一砲側弾薬庫連絡通路被覆壁南面立面図

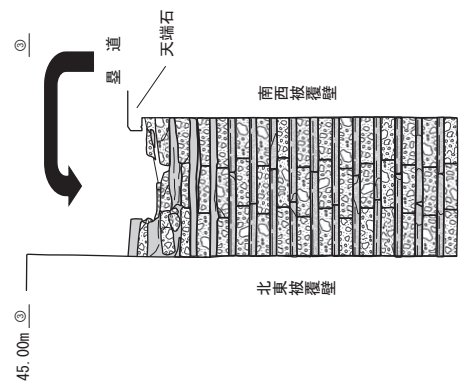


北西階段立面図

揚弾施設詳細図



南東階段立面図



第10図 皇道一砲側弾薬庫連絡通路(2)

（２）加農砲砲台・砲側弾薬庫（第 11～13 図）

砲側弾薬庫は出入口・採光窓を閉塞していたコンクリートブロックを除去、室内に入って詳細を確認した。室内は排気筒下の後面壁に沿って流入土が堆積していた以外、床面上に廃棄物などはなく、床面・脚壁・ヴォールト天井は良好に遺存していた。

砲側弾薬庫の出入口は、東側ブラフ積被覆壁と同一面に組積された煉瓦造アーチ外面から 2.5m 内側に建設された前面壁に設けられていた。前面壁と煉瓦造アーチ外面から前面壁外面までの脚壁の組積法は出隅部に七五煉瓦が用いられた広義のイギリス積で、煉瓦造アーチとともに焼過煉瓦が採用されていた。前面壁と西側ブラフ積被覆壁の間は 5.0m×4.0m の矩形の空間が造り出され、煉瓦アーチの内側は庇状にヴォールト天井に覆われ、西側ブラフ積被覆壁までは南北の階段に接続して露天となっている。

前面壁側壁の壁厚は煉瓦二枚積、46.0cm で、小口ー長手ー小口の段と七五ー小口ー七五の段が交互に組積され、連続する前面壁内外面の煉瓦列は側壁小口ー長手ー小口の段から長手列、七五ー小口ー七五の段から小口列に移行している。前面壁中央に煉瓦 1 枚半積、厚さ 34.2cm の弧状アーチの出入口、その両側に煉瓦 1 枚積、厚さ 22.4cm の弧状アーチの採光窓が設けられている。出入口は幅 1.2m、アーチ内背頂点までの高さ 2.2m、採光窓は幅 60.0cm、アーチ内背頂点までの高さ 1.00m の規模で、出入口の扉と採光窓の建具据付用部材は煉瓦壁内に組み込まれた直方体の安山岩切石が用いられている。安山岩切石は幅 23.0cm、高さ 27.0cm、奥行きは側壁厚と同じ 46.0cm で、出入口東壁には床面と同一面上に、弧状アーチ起点に上端を接して 2 切石、その中間に 1 切石、西壁には東壁中央石と対応する位置に 1 切石が組み込まれている。採光窓は東西で切石の配置が対称的で、出入口側の側壁中央に 1 切石、反対側の側壁には出入口中央切石と同じ高さに 1 切石、採光窓アーチ起点に上端を接して 1 切石が組み込まれている。切石の幅 23.0cm は煉瓦の長手 1 個体、高さ 27.0cm は小口 4 個体、奥行きは長手 2 個体に相当し、煉瓦積に組み込むために要求された規格で、出入口、採光窓の側壁に露出する面は滑らかに成形されているが、煉瓦に組み込まれている面は細かな調整痕が多く観察される。出入口の東側壁に組み込まれた 3 切石には外面に近い部位に扉据付金具を取り外した痕跡が残されていたが、上位の切石で垂直に装着された円形の金具痕が確認されたが、中央、下位の切石では破損が著しく金具の形状は残されていなかった。採光窓では側壁に組み込まれた 3 切石で、いずれもの室内側で建具据付金具の取り外し痕跡が認められたが、破損が著しく金具の形状は確認できなかった。

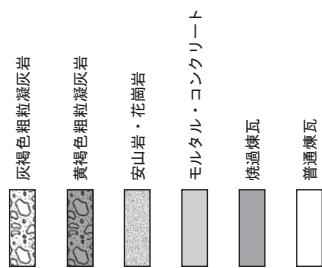
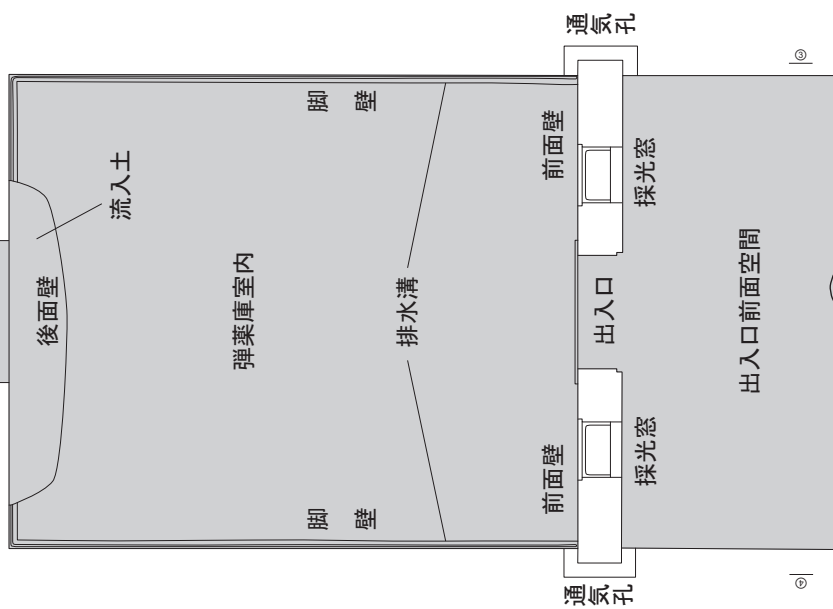
室内は脚壁間 5.0m、前面壁内面から後面壁間 6.0m、天井高 3.0m の規模で、室内の脚壁は前面壁外側の脚壁から連続して高さ約 55cm でヴォールト起点（穹源）となり、ヴォールト天井も前面壁外側から連続する半円アーチで、無筋コンクリートが採用されている。後面壁は煉瓦造で、前面壁内面、脚壁ともに組積法は出隅部に七五煉瓦が用いられた広義のイギリス積で、室内に組積された煉瓦は焼過煉瓦ではなく普通煉瓦に変化している。

床面は無筋コンクリートでモルタル仕上げされ、脚壁に沿って幅 7.8～8.5cm、深さ 2.5～3.0cm の排水溝が廻っている。排水溝から連続する脚壁は 20.0cm までモルタルで被覆され、床面は中央から排水口にかけて緩やかに傾斜している。前面壁に接する脚壁に床面から 5.0cm 上に底面を持つ、幅 13.0cm、高さ 50.0cm の通気孔が開口し、脚壁内に 32.0cm 延伸し、前面壁煉瓦積に沿って外曲し、前面壁外面に接する脚壁の開口部に通じている。通気孔内面は煉瓦積が確認され、室内と室外の開口部底面は開口部に小口を向けて敷いた煉瓦 2 個体、天井は脚壁煉瓦積上から前面壁内に埋め込むように煉瓦 1 個体を積んで通気空間を区画している。前面壁南側通気孔天井の煉瓦に複弁桜花章 b 種、底面に敷かれていた煉瓦に単弁桜花章 b 種の刻印が確認された。

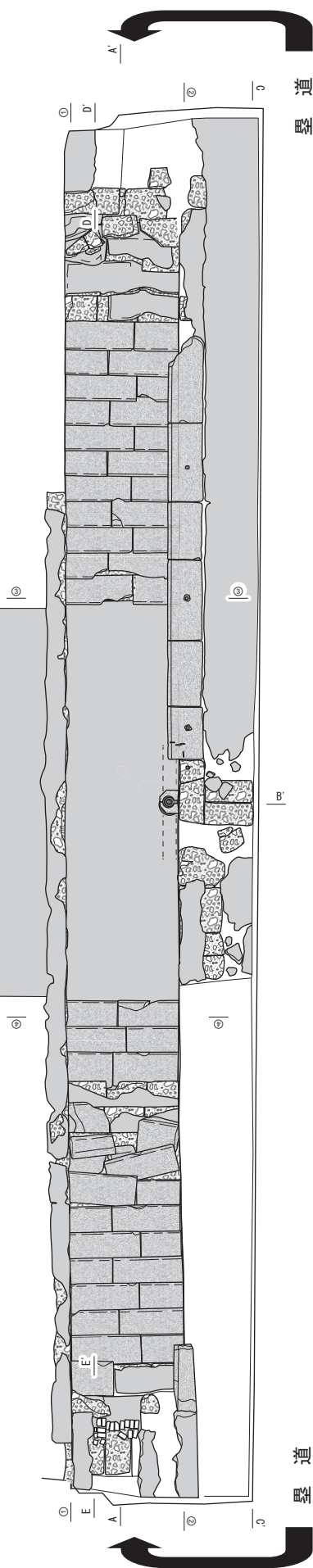
後面壁の中央に、地表に排気孔が開口する排気筒に通じる吸気孔が設けられている。吸気口は床面上 1.7m から幅 1.5m の範囲で壁面内側に向かって傾斜角 7 度で内傾しながら上方に 90cm ほど延伸して、ヴォールト天井に接した 12.0cm×1.5m の煉瓦構造体の中に作られた直方体の空間に繋がっている。後面壁の吸気口傾斜範囲からヴォールト天井内にかけては、モルタル被覆されている。



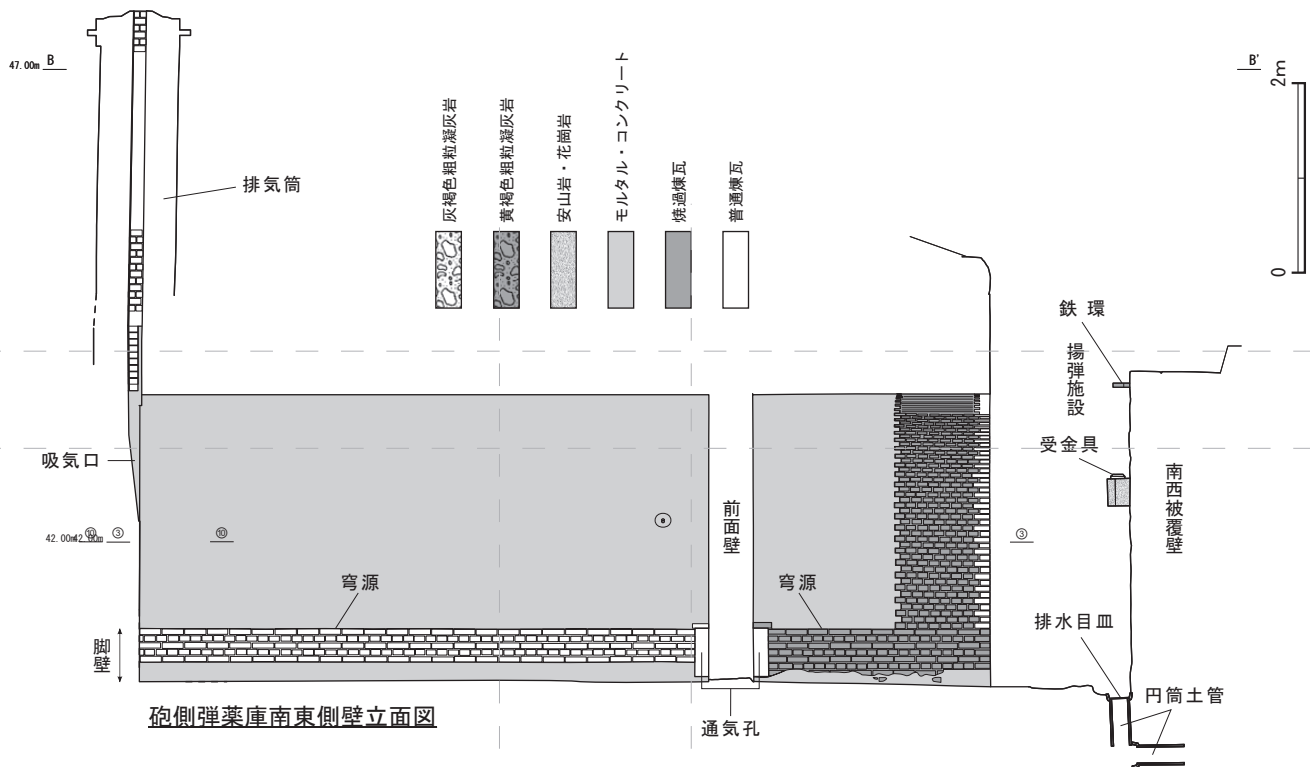
排気筒



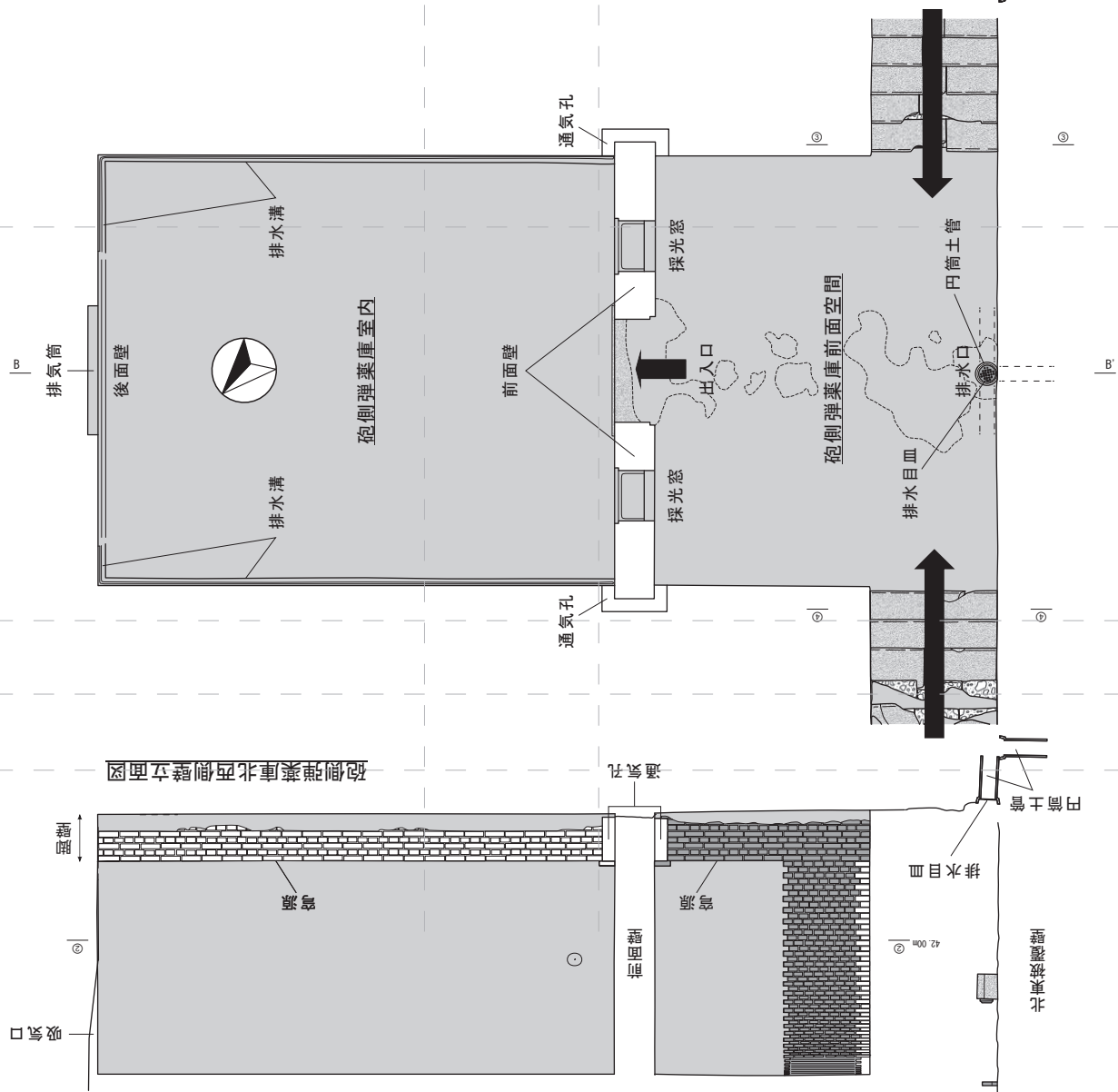
0 2m



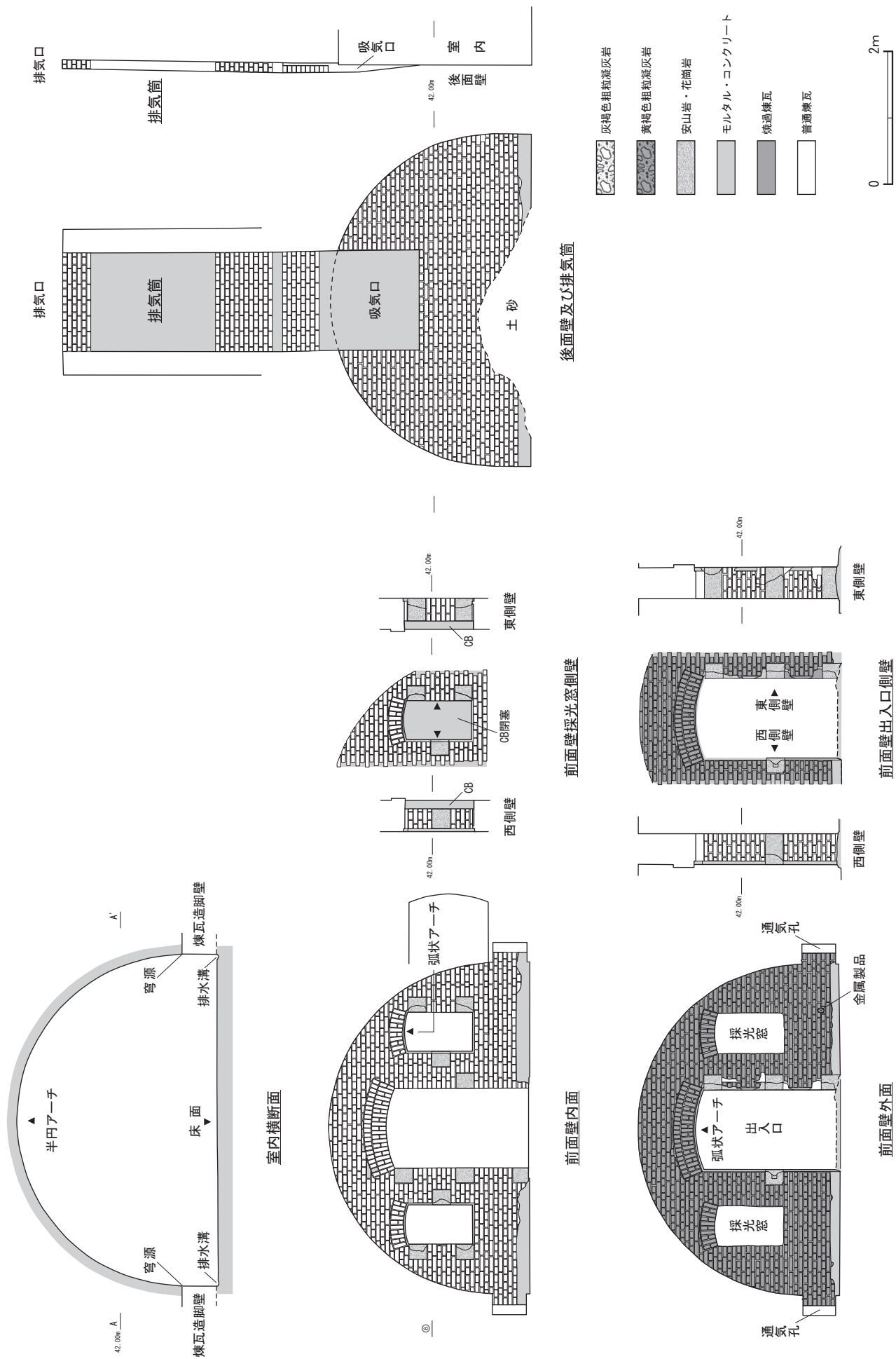
第11図 加農砲砲台・壘道一砲側弾薬庫連絡通路・砲側弾薬庫平面図



砲側弾薬庫南東側壁立面図



第12図 砲側弾薬庫平面図・立面図



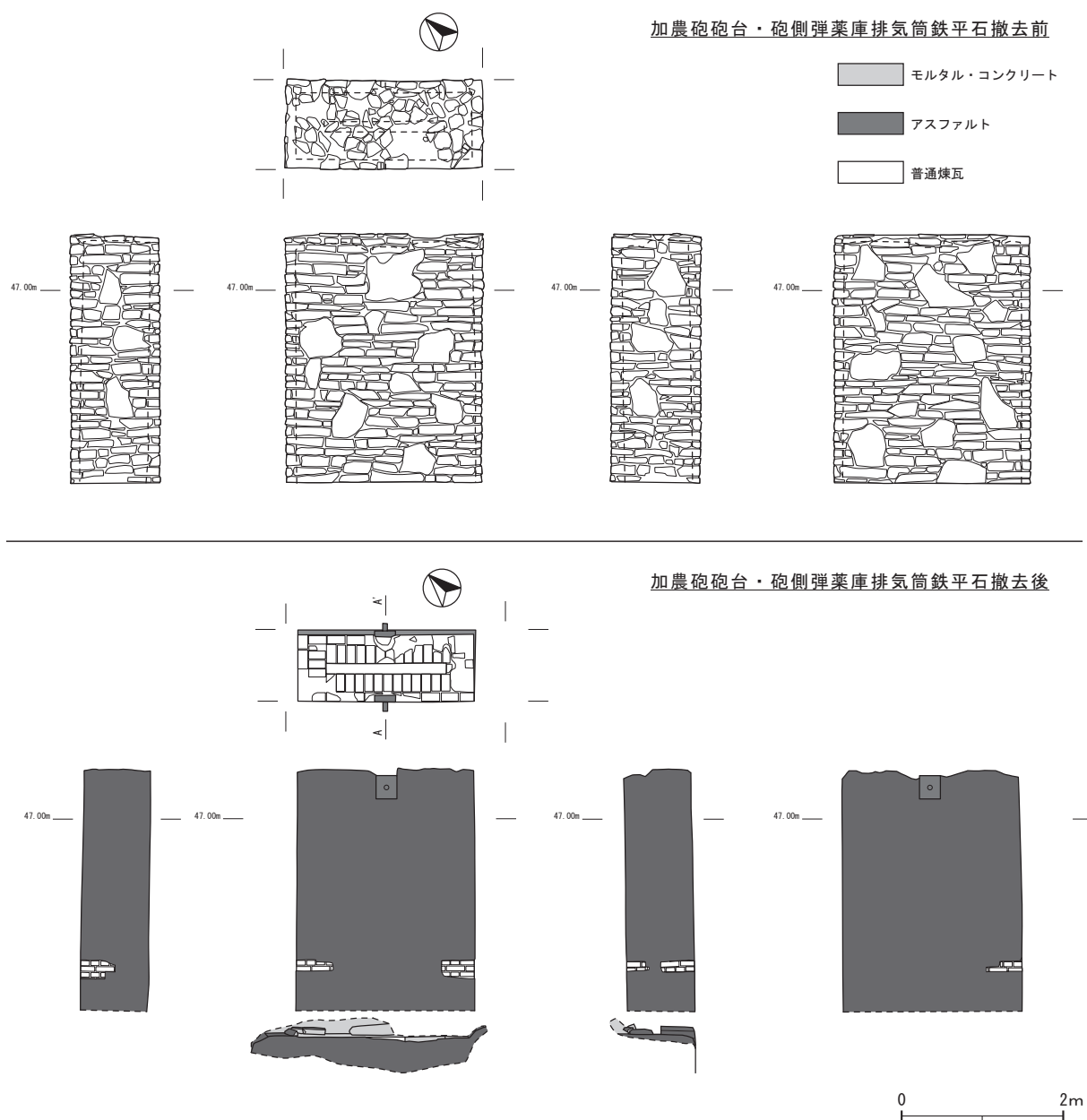
第13図 砲側弾薬庫詳細図

(3) 加農砲砲台・砲側弾薬庫排気筒 (第 14 図)

加農砲砲台・砲側弾薬庫の排気筒上部は、削平された横牆跡に建設された植栽に囲まれた休憩施設内に残されていた。現況での測量、鉄平石を剥離した後、再度測量調査を行った。

調査時の排気筒は側壁 4 面と上面が厚さ 10.0～12.0 c m の鉄平石で被覆され、短辺 1.0～1.2 m×長辺 2.4 m、高さ約 3.0 m の塔として公園の修景施設の一部に利用されていた。鉄平石下の排気筒は煉瓦造で、表面は上面を以外の 4 側面はアスファルトで被覆され、上面に煉瓦 1 枚半の煉瓦壁に囲まれて 13.0 c m×1.5 m の規模の排気口が開口していた。排気筒の短辺から長辺移行部のアスファルトを除去、露出した煉瓦面で煉瓦組積法を観察して、出隅部に七五煉瓦が用いられた広義のイギリス積であることを確認した。

排気筒上面の標高は 47.7 m、砲側弾薬庫の後面壁の吸気口内傾起点は標高 42.2 m、ヴォールト天井に接した直方体の空間への移行点は標高 43.1 m で、総合的に砲側弾薬庫の排気施設を復元すると、後面壁中央床面上 1.7 m から壁面を幅 1.5 m でヴォールト天井に向け内傾させ、ヴォールト天井に接した煉瓦塔内の 12.0～13.0 c m×1.5 m の空間に接続、煉瓦塔はほぼ垂直に 4.5 m 上方に延びて地表に開口した排気口に至る構造体として建設されている。



第14図 砲側弾薬庫・排気筒現況図

第2節 加農砲砲台・棲息掩蔽部

(1) 加農砲砲台・塁道―棲息掩蔽部連絡露天交通路(第15図)

棲息掩蔽部の調査は円形広場造成によって削平される範囲、砲側弾薬庫前の園路延長上の北西端で粗粒凝灰岩を石材としたブラフ積が露出している地点を対象とした(1次調査)。調査の結果、露出していたブラフ積の西側で新たなブラフ積、その間に階段が発見されたことで、これらの施設は塁道と棲息掩蔽部を連絡する交通路としての東西の被覆壁に区画された露天階段と判断された。検出された東西の被覆壁は、それぞれ砲側弾薬庫の東西被覆壁の延長線上に位置していたが、棲息掩蔽部・砲側弾薬庫ふたつの調査区で確認された被覆壁間は10.3m離れ、その間には棲息掩蔽部調査区と南西植栽の間に幅4.0mの園路が建設され分断されていたが、南北のブラフ積被覆壁は連続した被覆壁として建設された可能性が高い。

棲息掩蔽部の東西被覆壁は**30.0cm×30.0cm×60.0cm**規格の直方体切石が用いられたブラフ積で、壁面に現れる石材はすべて灰褐色粗粒凝灰岩が使用されていた。東側被覆壁は長さ5.9m、高さ2.4m確認され、最上段に組積された切石は上面の標高約45.0mで、下位の切石から約22.0cm階段側に突出して天端石列を形成していた。壁厚は長手1枚積み、90.0cmで、壁面に長手が現れる組積では、その内側に黄褐色粗粒凝灰岩が配石されていた。階段の傾斜角は約32.0度で、踏み面幅約1.5m、奥行き約34.0cm、蹴上高24.0cmの規模で、踏板には段鼻が丸く整形された厚さ6.5~7.5cmの花崗岩が用いられ、踏板下に灰褐色粗粒凝灰岩切石が台石として据え置かれていた。灰褐色粗粒凝灰岩の蹴込面は平坦に成形されていたが、上面は不整形な窪みが作出され、上位に据えられた花崗岩踏板の間にモルタルが充填されていた。

階段は7段確認されたが、下位で確認された1・2段目は段鼻が丸く整形された花崗岩製の踏板と踏石下に台石として配石された灰褐色粗粒凝灰岩が遺存し、その上位3段目は灰褐色粗粒凝灰岩、さらに上位4・5段は黄褐色粗粒凝灰岩、6・7段目は東壁に接して破損した黄褐色粗粒凝灰岩が残され、塁道路面に連絡する1段は消失していたが、東側被覆壁面に塁道路面と同じ高さの踏板装着の挟りこみが残されていた。

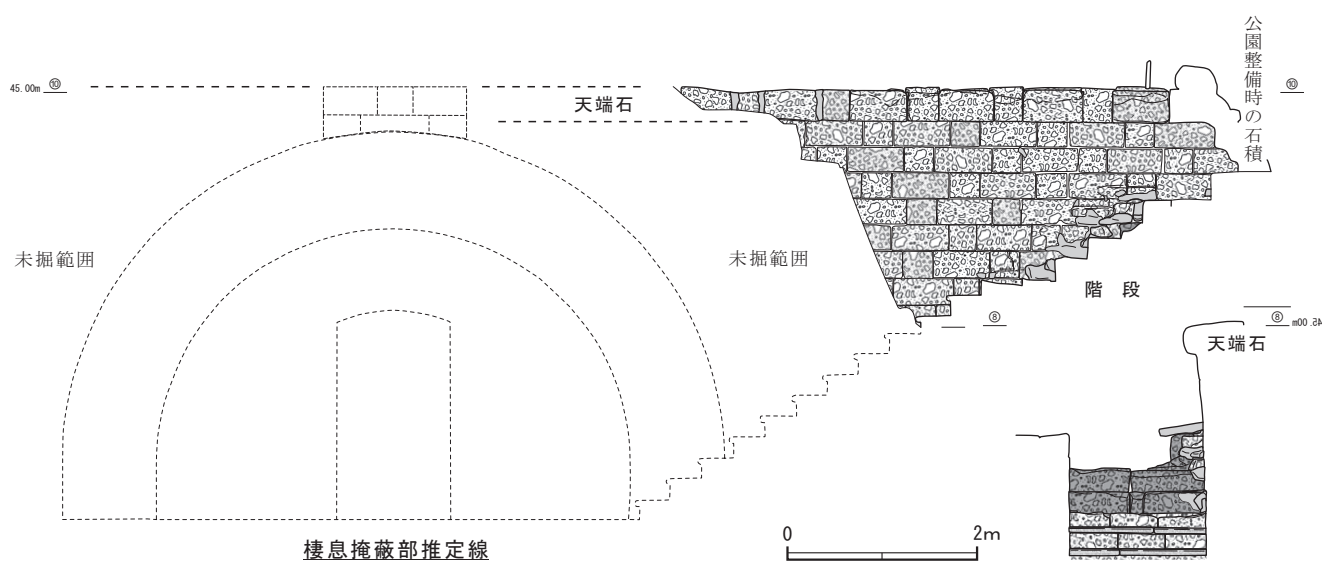
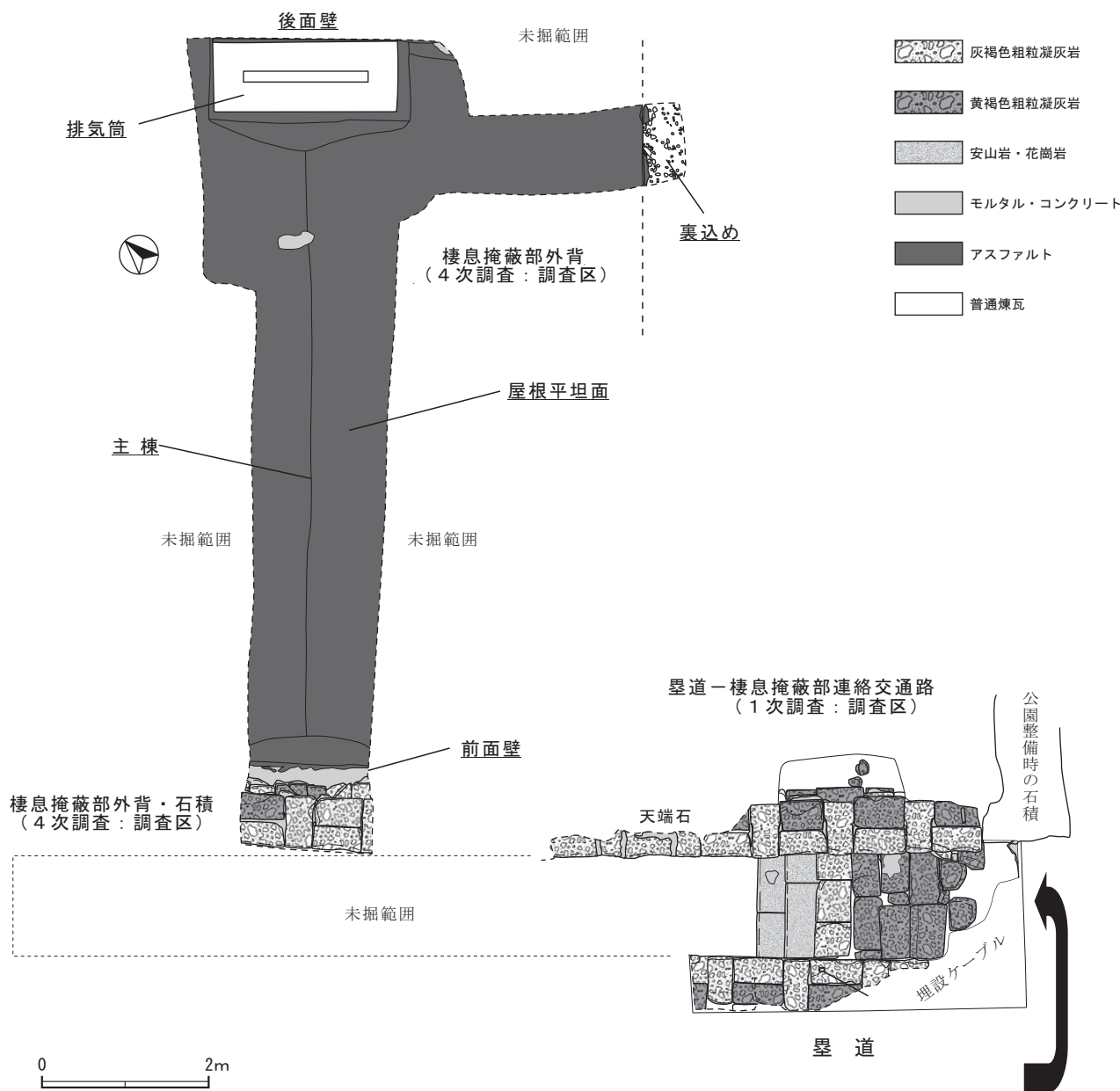
(2) 加農砲砲台・棲息掩蔽部外背(第16図)

1次調査で塁道―棲息掩蔽部間交通路の調査後、北側園地で棲息掩蔽部外背と排気筒が露出したため、発掘調査を含む測量調査を行った(4次調査)。調査の結果、棲息掩蔽部の規模、露天階段との位置関係などが判明した。

外背は全面アスファルトで被覆され、主棟の長さは7.0m、主棟南西端は傾斜角37.0度で約32.0cm外斜し、さらに水平に27.0cm延伸してブラフ積石積に接し、主棟北東端は傾斜角47.0度で約43.0cm外傾して排気筒を載せる平坦部に接している。ブラフ積石積は**30.0cm×30.0cm×60.0cm**規格の直方体切石が用いられ、壁厚は長手1枚積み、90.0cmで、壁面に現れる石材はすべて灰褐色粗粒凝灰岩が配置され、壁面に長手が現れる組積で内側に黄褐色粗粒凝灰岩が配石されていた。また、被覆壁表面に小口面が現れる灰褐色粗粒凝灰岩は、隣接する裏面に配された黄褐色粗粒凝灰岩と接する面が外側の面よりやや肥厚するように成形されていた。出入口上の被覆壁内面の石積は2段で、外背コンクリート上に組積された下段石材は、計測できた石材では1辺62.0cmで上位石材と近似する数値だが、高さは20.0cmの規格の石材が使用されていた。外背の屋根平面部は主棟から傾斜角15.8度で約1.0m傾斜して、傾斜角30.4度に変化して3.0m延伸して脚壁に移行している。脚壁の裏込め土は、砂質土にチャート、砂岩などの小円礫を多く含んでいた。

排気筒は煉瓦造で外背主棟から約30cm低い北東部平坦面に位置し、長辺2.2m、短辺88.0cmで、平坦面から上方に3.46m突出している。排気筒上面の排気孔は、13.0cm×1.5mの長方形の空間を作出している。

調査した範囲での計測値を根拠とすると、棲息掩蔽部構造体の規模は外背の両脚壁間8.0m、外背奥行9.0mで、前面壁の建設位置、脚壁、後面壁の壁厚は不明だが、室内の規模はこの外背数値内となる。



第15図 加農砲砲台・棲息隠蔽部

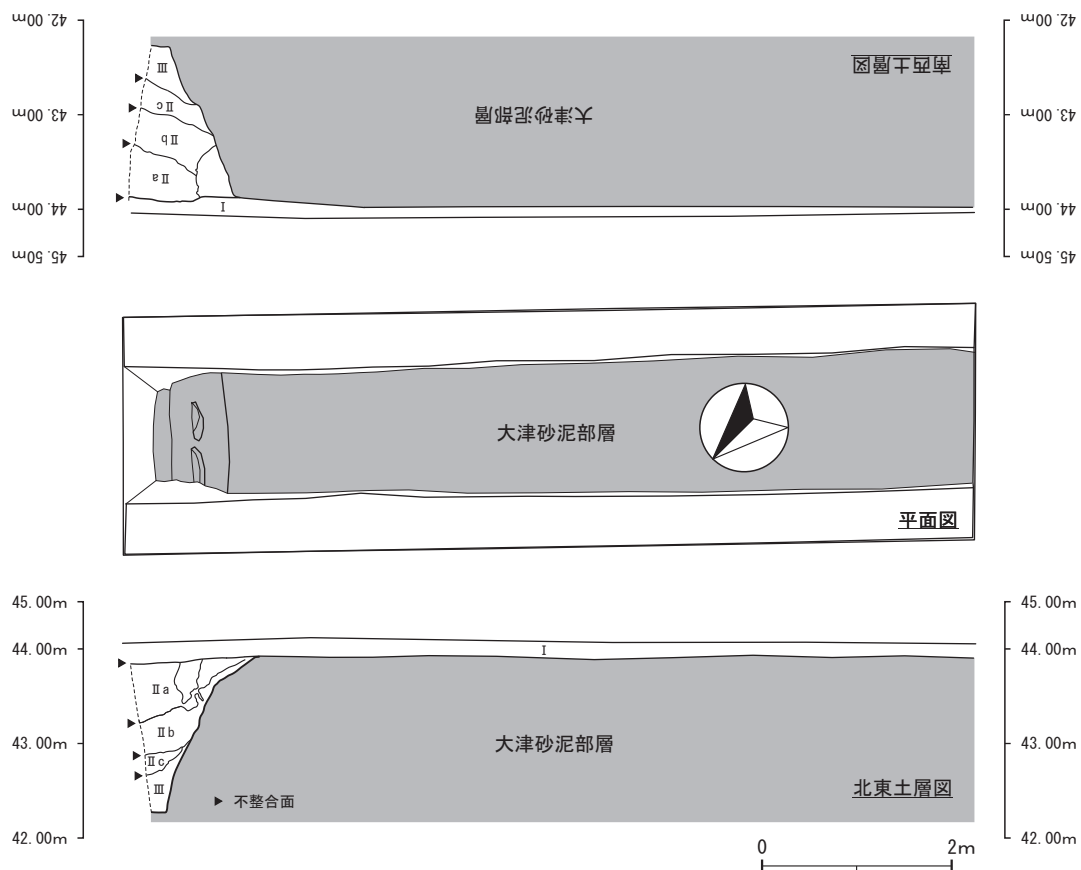
第3節 加農砲砲台・乾壕

(1) 1次調査(第17・18図)

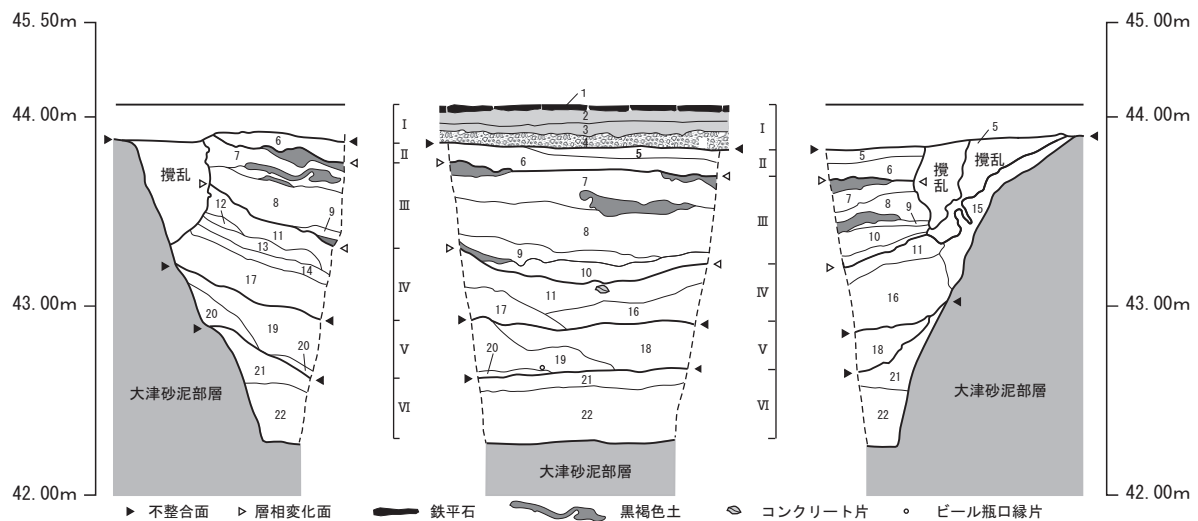
加農砲砲台・前面乾壕は中央公園建設前の測量図を参考に埋没している位置を推定し、砲側弾薬庫被覆壁の東壁面を基準線として、北東16.0mを起点に幅2.5m、長さ9.0mの調査区を設定した。1次調査時点では調査対象地は縁石で区画された北東植栽、鉄平石を敷き詰めた広場、園路が存在したことから、鉄平石と園路のアスファルトを除去した後に乾壕南西部・内岸斜面の検出を目的に発掘調査を行った。

鉄平石を除去後の表土下5.0～20.0cmで更新統大津砂泥部層が露出し、調査区南西端から北東7.9mで大津砂泥部層と乾壕埋積土との境界線が検出された。埋積土を排土した結果、乾壕は検出面から濠底まで深度1.7m、内岸斜面は濠底から上方1.4m付近までは傾斜角70.0～77.7度、以高検出面までは傾斜角32.7度に変化していた。

乾壕の埋積土は19層の細別層に分かれ、細別層は3面存在した不整合面と層相の変化からⅠ～Ⅵ層群に大別された。Ⅰ層群(1～4層)は乾壕建設時の地表面を削平、広場の鉄平石舗装工による造成層群で、Ⅱ層群(5・6層)は砂質土を基層とし、上面はきわめて硬く締まった硬化面を形成していたことから、舗装工以前の公園建設時の造成層群と想定された。Ⅲ層群(7～10層)は凹線を描く不整合面を覆っていた層群で、細別層間に黒褐色(10YR3/2)土薄層が断続的に出現する特徴的な層相を示していた。Ⅳ層群(11～17層)は大津砂泥層由来の砂泥土を基層とする層群で、上層(11層)にコンクリート片が包含されていた。Ⅴ層群(18～20層)は黄灰色粘性土と褐色粗粒砂の混合層を基層とする層群で、下層(19層)からビール瓶の口縁片が出土した。Ⅵ層群(21・22層)は公園建設以前の埋積土と考えられ、層相は灰色粘質土を基調としていた。



第17図 加農砲台前面乾壕・1次調査平面図・土層断面図



第18図 加農砲台前乾壕・1次調査土層断面図

加農砲砲台・前面乾壕堆積層説明（1次調査）

- I 層 1層 園路路面・鉄平石。
2層 上層基層コンクリート。骨材は径6mm以下の円礫。
3層 下位基層コンクリート。骨材は径35mm以下の円礫。
4層 円礫層。礫径は90～20mm。
- II 層 5層 オリーブ褐色（2.5Y4/3～4/4）砂質土と暗灰黄色（2.5YR4/2）砂質土の混合層。
6層 オリーブ褐色（2.5Y4/3～4/4）砂質土を基層として、黄褐色（10YR5/6）粘質土の混合層。
- III 層 7層 明褐色（7.5YR5/6）粘質土。
8層 明褐色（7.5YR5/6）粘質土。暗赤褐色（2.5YR3/4）土の小塊を散在的に含む。
9層 オリーブ褐色（2.5Y4/3～4/4）砂質土。
10層 オリーブ褐色（2.5Y4/3～4/4）砂質土。黒褐色（10YR3/2）土小塊を散在的に含む。
- IV 層 11層 オリーブ褐色（2.5Y4/3～4/4）砂質土。灰黄色（2.5YR6/2）砂質土・黒褐色（10YR3/2）土小塊を散在的に含む。
12層 灰黄色（2.5YR6/2）砂質土。オリーブ褐色（2.5Y4/3～4/4）砂質土小塊を散在的に含む。
13層 黄灰色（2.5YR6/1）粘性土と赤褐色（2.5YR4/6）粗粒砂の混合層。
14層 黄灰色（2.5YR6/1）粘性土塊と赤褐色（2.5YR4/6）粗粒砂の混合層。
15層 赤褐色（2.5YR4/6）粗粒砂を基層として、黄灰色（2.5YR6/1）粘性土塊を含む。
16層 暗灰黄色（2.5YR4/2）粘質土。軟質。
17層 灰色（10YR5/1～6/2）粘質土。粘性強。赤褐色（2.5YR4/6）粗粒砂小塊を散在的に含む。
- V 層 18層 灰オリーブ色（5Y5/3）～オリーブ色（5Y5/4）粘質土。赤褐色（2.5YR4/6）粗粒砂を含む。
19層 赤褐色（2.5YR4/6）粗粒砂を基層として、黄灰色（2Y6/1）粘質土大型塊を散在的に含む。
20層 暗灰黄色（2.5YR5/2）粘質土。黄灰色（2.5YR6/1）粘性土小塊を散在的に含む。
- VI 層 21層 灰色（10Y5/1～6/2）粘質土を基層として、赤褐色（2.5YR4/6）粗粒砂小塊を含む。粘性強。
22層 灰オリーブ色（5Y5/3）～オリーブ色（5Y5/3～5/4）粘質土。赤褐色（2.5YR4/6）粗粒砂を少量、散在的に含む。上位層より粘性強。

(2) 2次調査 (第19・20図)

2次調査は北東植栽除去後、乾壕北東の外岸斜面を検出して乾壕の規模を把握することを目的に1次調査区を南西に1.5m、北東に8.0m延長したが、大津砂泥部層と乾壕埋積土の境界線が検出できなかったため、延長した調査区南西に幅1.50m、長さ2.0mの拡張調査区を設定した。

検出された乾壕の大津砂泥部層と南西境界線、北東境界線間の距離は、園路・広場の舗装工によって形成された層群 (I層) 下面の計測値で10.8m、濠深は1.5~1.7m、濠底は約8.0mを測った。濠底は内岸斜面と外岸斜面付近の斜面脚と中央では変化があり、内岸斜面脚際約70.0cm、外岸斜面脚際約90.0cmの範囲は標高42.7mでほぼ水平面を形成していたが、濠底中央では斜面脚際の水平面より最大20.0cmほど深く不規則な凹凸を呈していた。内岸斜面は濠底から約82.0度で立ち上がり、濠底から上方1.0m付近で約70.0度に傾斜角を減じている。外岸斜面は濠底から約81.5度で立ち上がり、濠底から上方80.0cm付近で傾斜角25.0度の緩傾斜面に変化している。

2次調査では、乾壕の埋積土は31層の細別層に分かれ、細別層は5面層存在した不整合面と層相の変化からI~VII層に大別された。I層群 (1~3層) は1次調査の園路・広場舗装工から連続する表層群を形成し、拡張調査区南西端から2.3mまでは園路と北東植栽間の鉄平石舗装で被覆された広場で、以北1.5m間は広場から北東植栽に至る南傾した斜面が形成され、以北は植栽を中心とした修景施設があった土地の堆積層に相当する。

1次調査区から連続するII層群 (5・6層) 上面はきわめて硬く締まった硬化面を形成し、調査区北東端から2.7m地点ではI層群 (1~2層) で覆われ、II層群 (5・6層) を掘り込んで敷設されたコンクリート製の排水溝が残されていたことから、II層群 (5・6層) 上面の硬化面は植栽以前の土地利用面と判断された。

2次調査V層群 (19~23層) は1次調査III層群 (7~10層) に観られた特徴的な黒褐色 (10YR3/2) 土が細別層間に薄層として存在したことから、対応する層群と判断された。1次調査ではII層群とIII層群間に不整合面は確認できなかったが、2次調査では調査区北東で同じ傾斜で1次調査III層群に対応する2次調査V層群 (19~22層) を覆う堆積層群・IV層群 (10~18層) が存在し、さらに調査区北東端から約4.0mでこれらの堆積層群と不整合面で接し、逆方向に傾斜する堆積層群・III層群 (7~9層) が新たに検出された。1次調査のIII層群以下の堆積層群IV層群・V層群・VI層群は、それぞれ2次調査のVI層群 (23層)・VII層群 (24~26層)・VIII層群 (27~31層) に対応する。

中央公園建設前の測量図に記載された該地の地表面は標高45m前後で、1次・2次調査で検出された乾壕は建設当時の掘込面を公園造成によって削平されていることから、建設時の乾壕は80.0~80.2度の傾斜角で内岸斜面・外岸斜面を形成して、濠幅10.0m以上、濠底壕底約8.0m、濠深3.0m以上の規模だったと推定される。

加農砲砲台・前面乾壕堆積層説明

- I 層 1層 現表土層。暗褐色 (10YR3/3) 土層。腐食質で、軟質。
2層 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細粒砂質土層。黄褐色 (10YR5/6) 細粒砂、黒褐色 (10YR3/2) 細粒砂を散在的に含む。

不整合面1

- II 層 3層 黄褐色 (10YR5/6~5/8) 細粒砂層。径5mm以下の灰褐色 (10YR6/2) 細粒砂塊を散在的に含む。
4層 黒褐色 (10YR3/2) 砂質土、黄褐色 (10YR5/6~5/8) 細粒砂、黄褐色 (10YR5/6) ローム質土の混合層。
5層 褐色 (10YR4/4) 細粒砂層。均質な粒度。固結した褐色 (10YR4/4) 細粒砂塊を散在的に含む。
6層 黄褐色 (10YR5/6~5/8) 細粒砂層。灰黄褐色 (10YR4/2) 褐色 (10YR3/2) 細粒砂塊、黄褐色 (10YR5/6)

不整合面 2

- Ⅲ 層 7 層 にぶい黄褐色 (10YR4/3) ～褐色 (10YR4/4) 細粒砂層。径 50mm 以下のにぶい黄橙色 (10YR6/3 ～6/4) 細粒砂塊を散在的に、10mm 以下の黄褐色 (10YR5/6) ローム質土を少量、黒褐色 (10YR3/2) を縞状に不規則に含む。
- 8 層 にぶい黄褐色 (10YR4/3～4/4) 細粒砂層。均質。
- 9 層 にぶい黄褐色 (10YR4/3～4/4) 細粒砂層。黒褐色 (10YR3/2) を縞状に散在的に含む。

不整合面 3

- Ⅳ 層 10 層 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細粒砂層。均質な粒度。黒褐色 (10YR7/2) 細粒砂を散在的に含む。
- 11 層 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細粒砂と黒褐色 (10YR7/2) 細粒砂の混合層。
- 12 層 にぶい黄褐色 (10YR4/3～10YR4/4) 細粒砂層。褐色 (10YR4/4) 細粒砂を多く含む。
- 13 層 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細粒砂層。均質な粒度。黒褐色 (10YR7/2) 細粒砂を散在的に含む。
- 14 層 にぶい黄褐色 (10YR4/3～10YR4/4) 細粒砂層。褐色 (10YR4/4) 細粒砂を多く含む。
- 15 層 にぶい黄褐色 (10YR4/6) ～褐色 (10YR4/6) 細粒砂層。径 30mm 以下の黒褐色 (10YR3/2) 砂塊を散在的に、径 50mm 以下の黄褐色 (10YR5/6) ローム塊を少量含む。
- 16 層 にぶい黄褐色 (10YR5/4) ～褐色 (10YR4/6) 細粒砂層。均質。径 2mm 以下の黒褐色 (10YR3/2) 砂を散在的に含む。
- 17 層 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細粒砂層。均質な粒度。黒褐色 (10YR7/2) 細粒砂を散在的に含む。
- 18 層 褐色 (10YR4/6) ～明褐色 (10YR5/6) 細粒砂と黒褐色 (10YR3/2) 細粒砂の混合層。

層相変化面 1

- Ⅴ 層 19 層 褐色 (10YR4/6) ～明褐色 (10YR5/6) 細粒砂と黒褐色 (10YR3/2) 細粒砂の混合層。
- 20 層 にぶい黄褐色 (10YR5/4) ～褐色 (10YR4/6) 細粒砂層。均質。径 2mm 以下の黒褐色 (10YR3/2) 砂を散在的に含む。
- 21 層 にぶい黄褐色 (10YR4/3～10YR4/4) 細粒砂層。褐色 (10YR4/4) 細粒砂を多く含む。
- 22 層 明黄褐色 (10YR6/6) ～黄褐色 (10YR5/6) 細粒砂層。黒褐色 (10YR3/2) 細粒砂を縞状に、径 10mm 以下の赤褐色 (2.5YR4/6)・褐灰色 (5YR6/1) 砂塊を多く含む。

層相変化面 2

- Ⅵ 層 23 層 にぶい黄褐色 (10YR5/4) ～褐色 (10YR4/6) 細粒砂層。径 50mm 以下の褐灰色 (5YR6/1) 砂塊を多く含む。

不整合面 4

- Ⅶ 層 24 層 にぶい黄褐色 (10YR5/1) ～褐色 (10YR4/6) 細粒砂層。径 100mm 以下の褐灰色 (5YR6/1) 砂塊を含む。
- 25 層 褐灰色 (7.5YR4/1) 砂質土層。にぶい黄褐色 (10YR4/3～4/4) 砂塊を含む。
- 26 層 にぶい黄褐色 (10YR5/1) ～褐色 (10YR4/6) 細粒砂層。径 100mm 以下の褐灰色 (5YR6/1) 砂塊を含む。

不整合面 5

- Ⅷ 層 27 層 黄褐色 (10YR5/6) 細粒砂層。にぶい黄褐色 (10YR4/3～4/4) 砂塊を散在的に含む。
- 28 層 褐灰色 (10YR4/1～5/1) 粘質土層。強い粘性を示す。
- 29 層 オリーブ褐色 (2.5Y4/3～4/4) 砂質土と黒褐色 (2.5Y3/2) 土の混合層。
- 30 層 褐灰色 (10YR4/1～5/1) 粘質土層。褐色 (10YR4/6) ～明褐色 (10YR5/6) 細粒砂を散在的に含む。
- 31 層 褐灰色 (10YR4/1～5/1) 粘質土層。褐灰色 (10YR4/1～5/1) 粘質土塊を多く含む。

第4節 榴弾砲砲台・観測所付属室

既設の（旧）平和モニュメントを撤去、整地した際に煉瓦積が一部露出したアスファルト被覆された構造物が発見された。横須賀市環境政策部（現建設部）公園建設課を通して連絡を受けた横須賀市教育委員会では現地を確認、発見場所と構造体の特徴から既に榴弾砲砲台観測所の上部構造体は撤去・消失していたが、観測所付属室の外背の可能性があると判断し、発見された構造体の周辺を清掃、測量調査を行った。また、周辺を清掃した結果、消失した観測所と付属室を連絡する伝声管が発見されたことで、伝声管にカメラを挿入して付属室・室内を撮影し、室内の構造と遺存状況の把握を行った（第21図）。

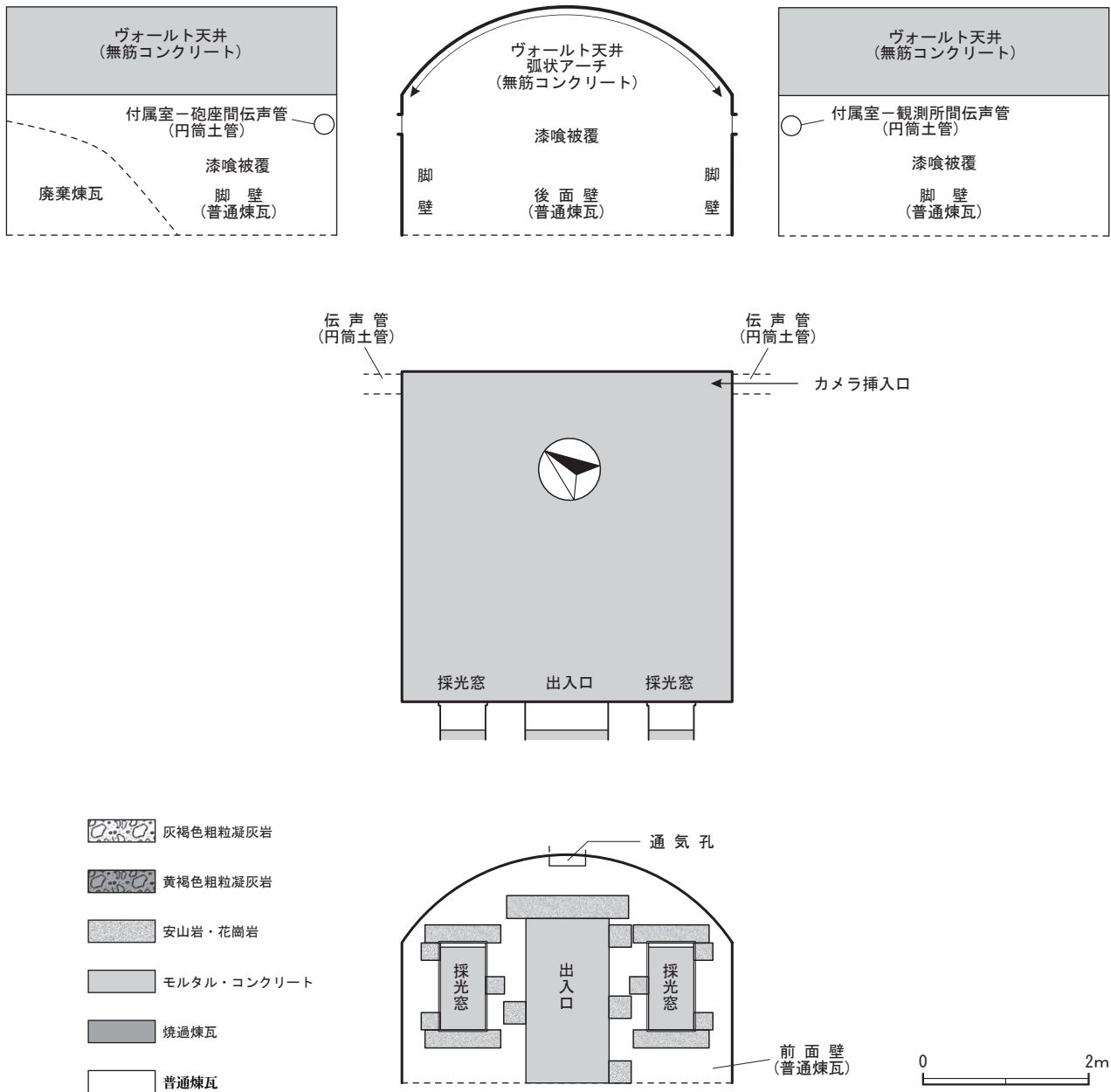
観測所付属室外背は出入口を候補された煉瓦壁で閉塞され、出入口の存在する前面壁と室内に相当する範囲が露出した。前面壁に相当すると考えられる範囲は後補煉瓦壁から67.0cm、室内範囲は南西辺（後面壁）3.8m、北西・南東辺（両脚壁）4.0m、高さ1.2mの規模が確認された。後面壁・脚壁の壁厚などは不明だが、室内はほぼ矩形で幅4.0m、奥行き4.0m以内と推定された。外背はアスファルトで全面被覆され、撤去工事により後面壁外面と近接したヴォールト天井のアスファルトの一部が剥ぎとられ、後面壁を組積する煉瓦、ヴォールト天井のコンクリートと混和された骨材の円礫が露出していた。

外背主棟の標高は51.2mで、主棟は後面壁に接する部分は壁に沿って垂下し、後面壁から出入口方向に3.7mの地点で約35.0度の傾斜角で外傾して前面壁上面に移行している。外背の屋根平坦面は主棟から23.0度の傾斜角で約2.3m傾斜して、脚壁に移行すると推定された。

後面壁の煉瓦積は壁厚1枚半積で、露出面では室内側に長手を縦位、室外側に小口を横位に組積されていた。屋根平坦部下方脚壁に近い煉瓦積では、長手列で単弁桜花章b種、複弁桜花章a種、小口列で単弁桜花章a種、各1個体に押捺されていた刻印が確認された。煉瓦積は7段が確認されたが、壁面に向かって主棟下の後面壁最頂部から3段は小口1個体列、以下長手1個体列、七五一小口ー七五列で積まれ、以下はアスファルトによって被覆されていたために、列全体の組積は不明だが、煉瓦列端部の処理は小口による処理2列が確認された。これらの末端処理から、煉瓦組積法は端部に七五煉瓦を採用した広義のイギリス積と判断される。

検出面での観測所付属室外背周縁では、ヴォールト天井と脚壁間の粗粒砂による裏込めが確認され、外背南東辺から1.2m南東で径22.0cmの円形土管を用いた伝声管が開口していた。円形土管は地表下70.0cmまで確認され、地下の付属室に向かって傾斜角57.0度で延伸していた。

観測所付属室の室内は調査の対象外だったが、伝声管内に土が充填されていなかったため、開口した円形土管からカメラを挿入して室内を撮影、今後の文化財保護の情報収集のため、遺存状態を確認した。カメラは室内の伝声管開口部からわずかに内部に届き、前面壁・北西脚壁・後面壁の一部、ヴォールト天井を撮影することができた。前壁・脚壁・後面壁は煉瓦造で、壁面に現れる煉瓦は普通煉瓦が用いられ、漆喰で被覆されていた。前面壁に設けられた出入口・採光窓はコンクリートブロックで閉塞され、床面には廃棄物とともに土砂が薄層で堆積し、前面壁北東側の採光窓下から北東脚壁に沿って、建築用普通煉瓦が積み上げられていた（写真1）。積み上げられたいくつかの煉瓦面で、長手・小口に焼過面と思われる色調の変化が確認された。観測所付属室出入口を閉塞した後補煉瓦壁に桜花章の刻印が確認された（第23図①②）ことから、これらの煉瓦は観測所撤去によって生じた煉瓦の一部と想定される。ヴォールト天井は外背で確認された無筋コンクリートで、弧状を呈していた。天井が弧状を呈することから、相対的に脚壁は高く、北東脚壁の天井ヴォールト起点と後面壁に近接した位置に観測所付属室－榴弾砲座間の伝声管が開口していた（写真2）。また、前面壁頂部に、通気孔と考えられる長方形の孔が開口していた。撮影した写真から観測所付属室・室内の構造は概略把握でき、映像と伝声管の大きさなどを基準にすれば、観測所付属室は脚壁間・前面壁－後面壁間約4.0m、天井高約3.0mで、弧状アーチによるヴォールト天井の小規模な空間と推定される（第22図）。



第22図 榴弾砲砲台・観測所付属室室内推定図



写真 1 前面壁・北東脚壁と廃棄煉瓦



写真 2 付属室一砲座間伝声管と後面壁

第5節 加農砲砲台－榴弾砲砲台連絡隧道

榴弾砲砲台・観測所跡で付属室調査後、平和モニュメント及び進入路の新設工事が進行する中で、観測所跡の高地から園路に接する南西斜面地で、加農砲砲台－榴弾砲砲台連絡隧道の加農砲砲台側坑口が開口した。加農砲砲台・棲息掩蔽部外背の調査中だったため、加農砲砲台・棲息掩蔽部外背の調査終了後、引き続いて加農砲側坑口の露出した範囲を清掃、測量を中心とした調査を行った。

露出した隧道坑口施設は、隧道内の煉瓦造脚壁とそれに連続する隧道坑口前の石造被覆壁、コンクリート造路面で構成されていた。隧道の煉瓦造脚壁は壁厚 69.5 cm、長手 3 枚積で、出隅部を七五煉瓦で処理された広義のイギリス積で組積されていた。隧道内脚壁は焼過面を表面にして組積され、路面から 1.6m 高い地点でヴォールト起点となっていた。脚壁上面は坑口から坑口内 75.0 cm まではアーチ起点として斜面が作出された煉瓦が組積され、以降の隧道内部はモルタル仕上げ面をはさんで骨材の露出したコンクリートに変化していたことから、出入口アーチは煉瓦造、ヴォールト天井は無筋コンクリートと判断された。また、アーチ起点となる煉瓦列は以下の脚壁面煉瓦列に対して直角ではなく、10～12 度ほどの角度を以て組積されていたことから（写真 1）、アーチは隧道坑口と前面空間が直角に交わらない場合に採用される斜架拱だった可能性が高い。また、煉瓦脚壁の内側に組積された煉瓦 2 個体で複弁桜花章 a 種（第 23 図①）、単弁桜花章 a 種（第 23 図②）の刻印が確認された。

隧道内の路面は坑口の外側で路幅が 30.0 cm 広がり、隧道脚壁から平行して延伸する灰褐色粗粒凝灰岩縁石によって区画されていた。路面区画縁石から 10.0 cm 外側に、隧道脚壁に接して 32.0 度西傾、南西に延びるブラフ積被覆壁が存在した。ブラフ積被覆壁は壁厚 55.0～57.0 cm、長手 1 枚積で、石材は 25.0 cm×30.0 cm×55.0～57.0 cm の規格で、被覆壁外面に現れる石材は灰褐色粗粒凝灰岩、外面に長手が組積された内側には黄褐色粗粒凝灰岩が用いられていた。ブラフ積被覆壁上辺に配置された石材は、煉瓦脚壁に接する石材の外側に積まれた石材 1 個体とその下位に積まれた石材 2 個体は外端面を約 50.0 度の斜度で同一面を形成して切り取られていた（写真 2）。これら斜位に面取りされた 3 個体は、その斜傾面にモルタルが付着していた（写真 2）。斜傾面が作出された石材の上位・下位に組積された石材上面にもモルタルが付着していたことから、これらの石材は天端石下の石積で、遺存していたブラフ積被覆壁の上には煉瓦脚壁に接して横位、斜位、横位の天端石が組積されていたと推定された。

調査によって、詳細が不明だった観測所の南西麓に建設された加農砲砲台－榴弾砲砲台を連絡する交通路としての隧道の存在とその建築材・建築仕法的一端が把握された。中央公園建設時に作成された測量図（第 4 図）を参照すれば、隧道長は 7.4～7.6m、加農砲砲台側の坑口幅約 2.0m で、坑口南西端と北東端は直角ではなく、約 5.0 度ずれた線で結ばれていたと推定される。



写真 1 隧道煉瓦アーチ起点



写真 2 ブラフ積被覆壁・天端石下石積

第6節 出土遺物

(1) 建築用普通煉瓦 (第24・25図)

第24図1は角をわずかに欠損するだけのほぼ完形で、大きさは小口103～107mm×58～61mm、長手220～221mm、重量2,440gである。平2面は長辺に平行した擦痕が残るが、部分的にナデられ、擦痕が認められない部分も存在する。色調は総じて赤色(10YR4/6)～赤褐色(10YR4/4)を呈しているが、平の中央は赤褐色(2.5YR6/4)～にぶい橙色(10YR5/4)と変化がある。長手2面に、厚さは8～10mmの隣接煉瓦間の目地モルタルが残っている。刻印は径21～23mmの単弁桜花章a種で、明瞭に押捺されている。榴弾砲砲台・観測所付属室前面壁を閉塞していた後補煉瓦壁に使用されていた。

第24図2は側縁をわずかに欠損するだけのほぼ完形で、大きさは小口103～106mm×59～62mm、長手220mm、重量2,310gである。平2面は長辺に平行した擦痕が残る。色調は総じてにぶい赤褐色(7.5YR5/3)～赤褐色(10YR4/4～5/4)を呈しているが、長手に残る積み重ね痕の内部は赤色(10YR5/6)と変化がある。刻印は径21～23mmの複弁桜花章a種で、明瞭に押捺されている。榴弾砲砲台・観測所付属室前面壁を閉塞していた後補煉瓦壁に使用されていた。

第24図3は片側の小口面を欠損するもので、大きさは小口105mm×61～63mm、長手169mm以上、重量2,405gである。平2面は長辺に平行した擦痕が残るが、全体的にナデられ、滑らかな器面を呈している。片側の長手面に不規則な方向の煉瓦片と厚さ32mmほどのモルタルが付着している。平に明瞭な積み重ね痕が残り、積み重ね痕に接する範囲はにぶい赤褐色(10YR6/4)で、その内側は赤色(7.5YR4/6)を呈している。刻印は径18mmの単弁桜花章b種で、明瞭に押捺されている。加農砲砲台の壘道一棲息掩蔽部連絡露天交通路の埋土から出土した。

第25図1は角を欠損、側縁の一部が剥離しているもので、大きさは小口108mm×61～64mm、長手228mm、重量1,790gである。刻印が押捺される平面は長辺に平行した擦痕がわずかに残るが、全体的にナデられ、滑らかな器面を呈している。色調は総じて橙色(2.5YR6/6～6/8)を呈しているが、長手に明瞭な積み重ね痕が残り、明赤褐色(2.5YR5/6)、橙色(2.5YR6/8)と変化がある。刻印は径17～18mmの複弁桜花章b種で、明瞭に押捺されている。加農砲砲台調査地区で表面採集した。

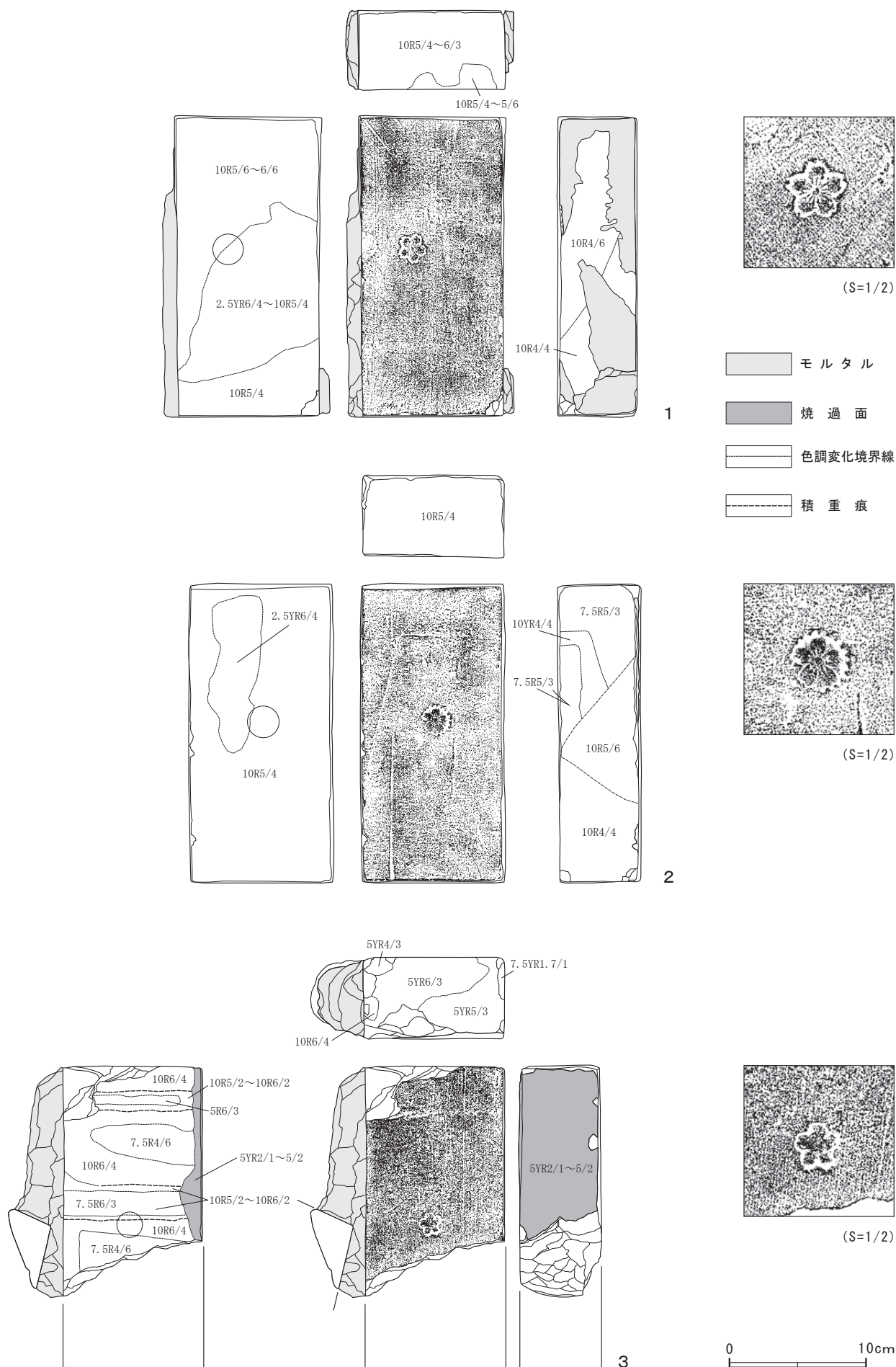
第25図2は片側の小口を欠損するもので、大きさは小口104mm×61mm、長手遺存長124mm、遺存重量1,150gである。刻印が押捺される平面は、縮緬状を呈している。刻印は長径70mm、短径30mmの縦長の楕円形内に「日本」の文字が刻まれている。色調は総じて赤褐色(10YR5/4)を呈している。横須賀市自然・人文博物館の人文館入口に近接した中央公園の植栽内から表面採集した。

(2) 木札 (第26図1)

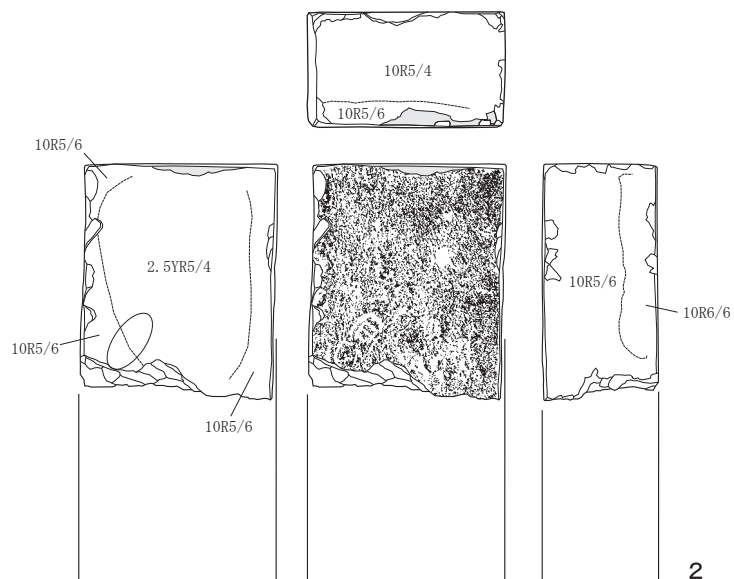
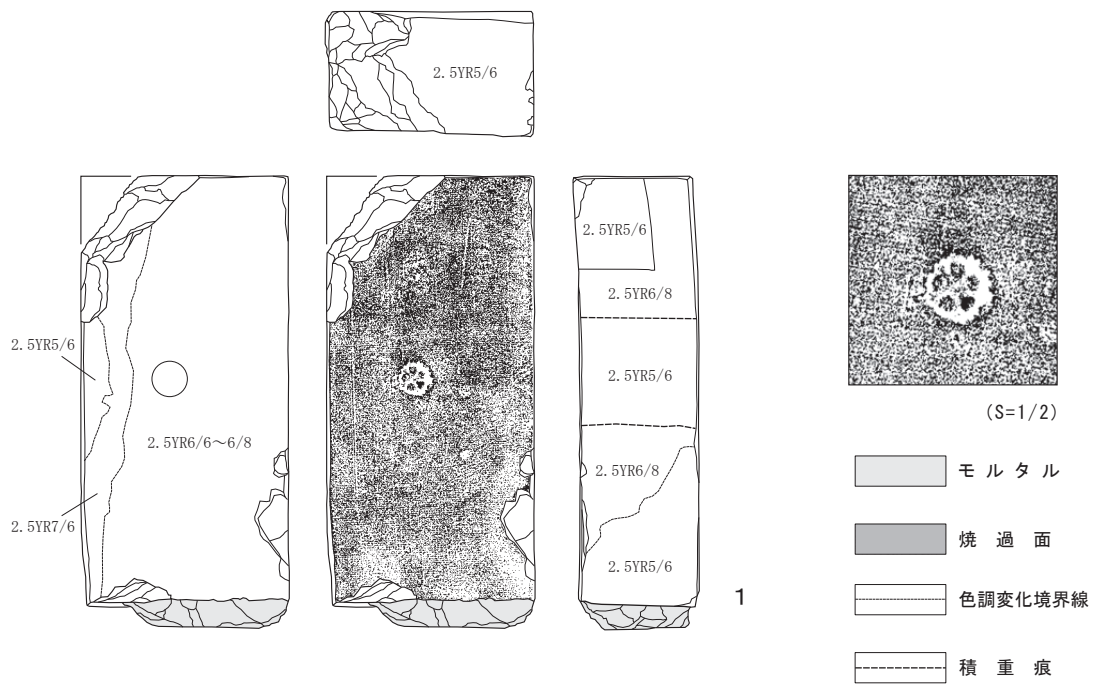
第26図1は加農砲砲台・棲息掩蔽部一壘道連絡露天交通路の埋土から出土した木札で、「第七(號?)」と墨書されている。大きさは幅87mm、長さ300mm、厚さ20mmで、文字列の上方に、1辺15～16mm、厚さ9mmの角頭で、遺存長20mmの矩形平頭鉄釘が挿入された状態で出土した。

(3) 排水目皿 (第26図2)

第26図2は鋳造製の丸形枠付き格子目の排水目皿で、大きさは直径194～196mm、厚さ10mm、重量990gである。格子孔は1辺17～20mmの大きさで、丸形枠内の十字線上に24孔、丸枠に沿った対角線上4方向に三角形孔8孔、計32孔が穿たれているが、丸枠に沿った2孔は貫通していない。加農砲砲台・砲側弾薬庫一壘道連絡露天交通路の階下路面の排水口を覆っていた。

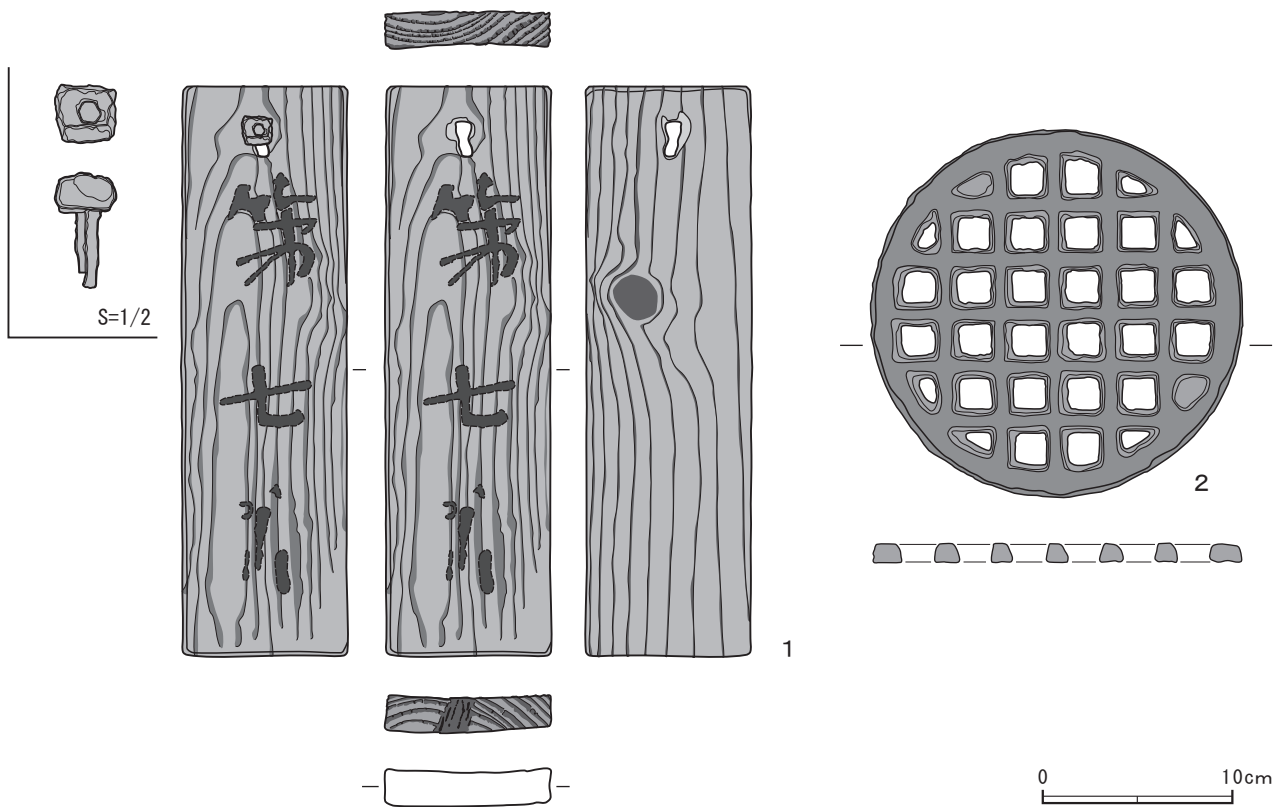


第24図 出土遺物（1）



0 10cm

第25図 出土遺物（2）



第26図 出土遺物（3）